

エト9F-63

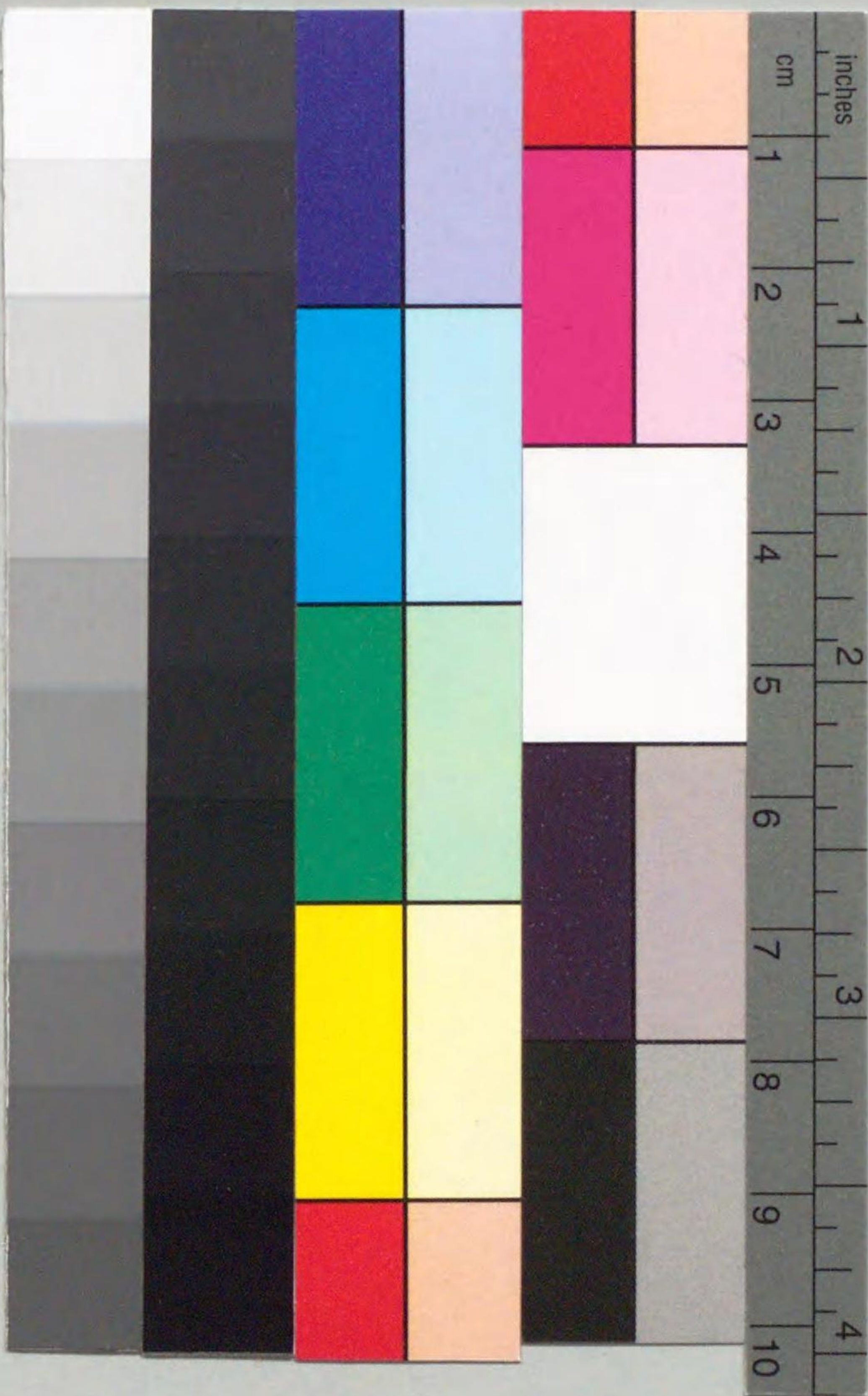
赤子塚の話

著 柳田國男



編一第書叢邊爐

版藏社文玄



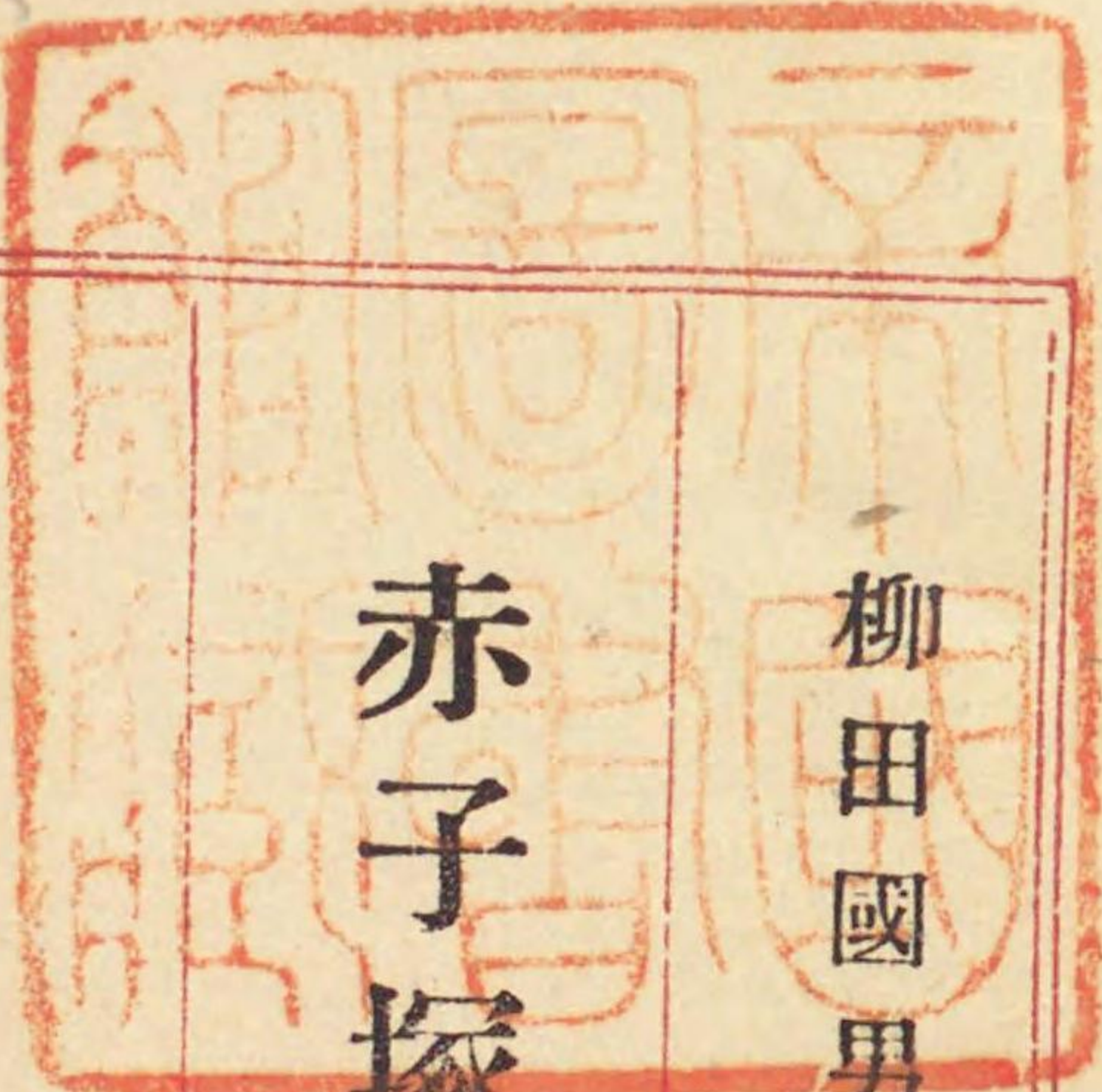
~~388.1~~

~~Y53~~

~~7~~

7

~~389/2~~



柳田國男著

赤子塚の話

立
文
社
版



KH22

52



811518

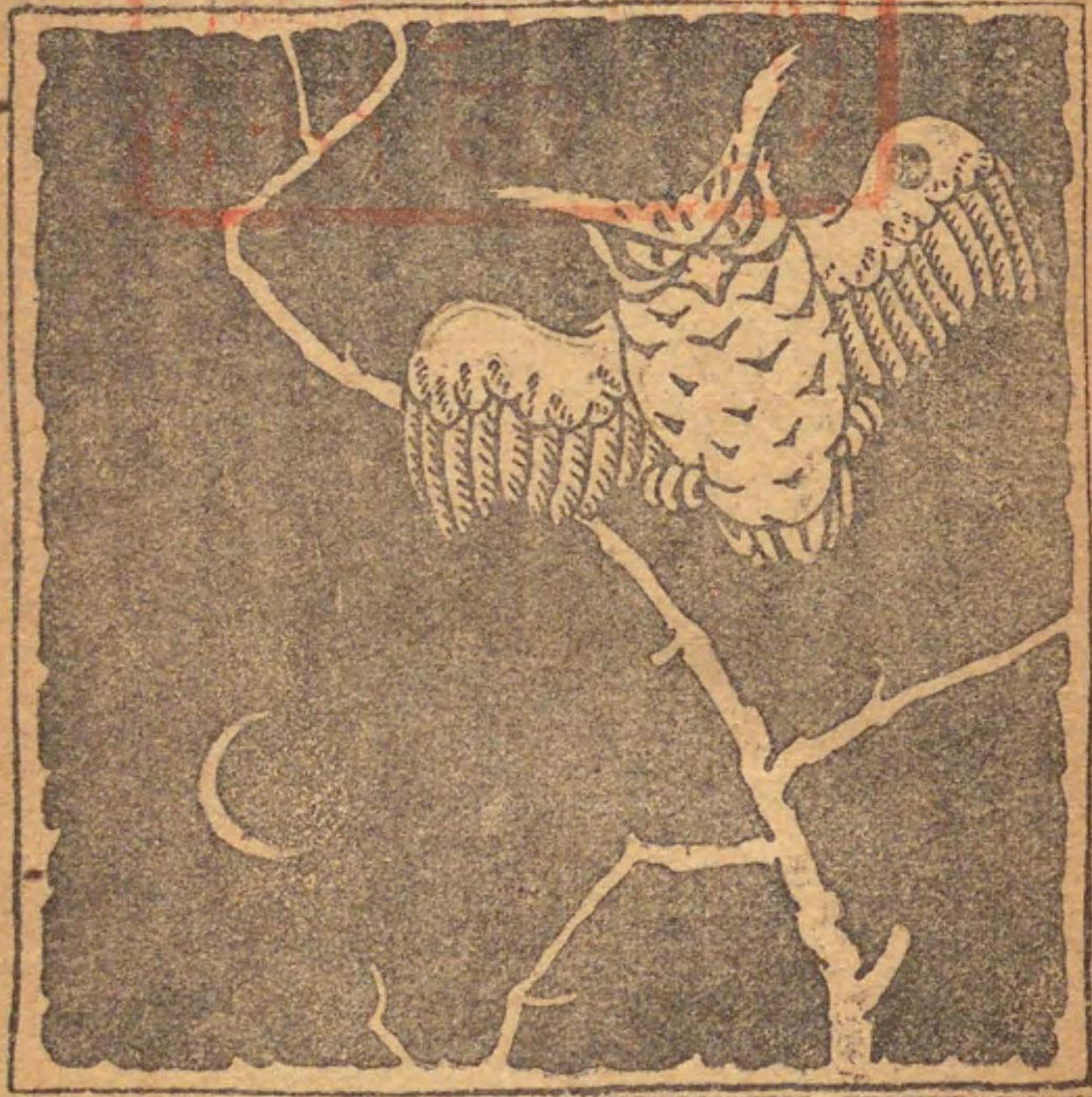
爐邊叢書序

此叢書の一つの價値は、寸分も作り話の無いことです。敢て有益とは言ひませぬ。面白ければ其で結構です。何となれば、現實にして且面白ければ、是ほど結構な人世は無いからです。爐邊とは有りますが、爐の無い家では火鉢の側でもよろしい。又炬燵の上でも宜しい。夏は涼しい處で読んで下さい。みんなの中で、一番やさしい、聲の佳い人に読んでもらつて下さい。但し「あかり」だけは、蠟燭見たやうな昔風のものではいけません。新しい光で読んでもらひたいのです。

赤子塚の話

目次

- 一 日向の頭黒……………二
- 二 頭白上人……………五
- 三 土中出誕の僧たち……………八
- 四 桑原の欣淨寺……………三
- 五 通幻禪師の故郷……………六
- 六 佐夜の中山……………九
- 七 夜啼の願掛……………四
- 八 赤子の聲と石……………九
- 九 神に祀つた赤子……………三



赤子塚の話

引用書目等索引

一〇	啼地蔵、啼薬師	三六
一一	赤子の足跡	四〇
一二	塞の河原	四二
一三	石を積む風習	四七
一四	道祖と地藏	五〇
一五	子捨川	五四
一六	子敦盛と下り松	五六
一七	棄兒の儀式	六三
一八	子賣地藏	六五
一九	子安神の變遷	六九
二〇	境の神に子を禱る風習	七四
	引用書目等索引	七九

一日向の頭黒

今から二百年ばかり前、神道の學者で増穂殘口と云ふ人が、京都に住んで居た。俗人に分り易い色々な本を書いて、佛法を退け而も自己流の珍説に據り、昔からの神様を解釋しやうとした。小説なども書いた人である。此人には別に用は無いが、私の言ひたいのは、如何して殘口などと云ふ名を考出したかと云ふことである。想像に過ぎぬけれども多分當つて居るだらう。是は日向の古風土記にある、頭黒の話に基いたものと思ふ。神功皇后が新羅を討つて凱旋遊ばされ、韜馬峰と申す所に御幸あつて、弓を射させたまふ時に、土の中から何か黒い物が頭を出したのを、御弓の筈を以て掘起したまへば、男

女二個の人であつた。今日の國幣小社都農神社の御神は、皇軍守護の勳功大なりし故に乃此兩人を此神の神人として召仕はれ、子孫次第に増加し其一族の名を頭黒と呼んで居た。然るに日向守に心得違の人が有つて、神に專屬すべき頭黒の徒を、賦役に宛てゝ使用した處が、明神の怒に因つて疫病大に行はれ、頭黒共も亦次第に死絶え、再元の男一人女一人に爲つた。此事を地方の舊記には、死盡僅殘男女二口と書いたと云ふ(一) 皇道の衰微を憤る近衛家々來の増穂氏が、國の政治が悪かつた故に、先上古の由緒を傳ふべき神部の家から、最初に迹を絶つて行くのだと云ふ意を寓して、斯な奇抜な名を用ゐる、世を刺激しやうとしたことは略疑が無い。而して土の中から活きた人の出たと云ふのは、恰も此神道家の居た時代に、隨分行はれて居た所謂世間話の一つである。今度は此話を少しして見やうと思ふ。

貝原益軒翁が曾て但馬の人から聞いたと云ふ話に、此人出雲の松江に旅をした時、十

歳ばかりの男の兒の、皆が穴子くと呼んで居る者を見た。此兒が母の胎内に居た間に俄の病で其母親が死んだ。其父愛惜の情に堪へず、其墓の周を徘徊すること三日三晩、三晩目の夜中に塚の中で赤子の啼く聲を聽付け、鍬を持つて來て掘返して見ると、男の子が生れ妻は蘇つて居た。母も子も共に恙なしと云ふことで、此だけ目出たい話はもう他には無い。此類の奇談は一つ宛聽いて行くと、何時まで經つても何の事か分らぬ。即比較の必要が大にある。通例は話が今一層不思議で、従つて只の偶然では之を説明しにくく、多くは神佛の御力、之を受ける者は世を濟ふ程の、高僧碩徳と云ふことになつて居る。松江の穴子の話に若誇張があつたとすれば、やはり其原因を百姓の胸に浪打つ、遠い世からの奇瑞を求むる感情に、辿つて行かねばならぬやうに考へられる。

二 頭 白 上 人

日向の頭黒と對立して、東には又常陸の頭白上人の話がある。頭白は筑波の東光院の僧、又大會根千光寺の中興開山とも謂ふ。天台宗の碩學であつて、近隣の諸國に教化の跡が多い。生れながらにして頭白かりし故に、此名を以て知られて居ると謂ふが、夙に剃髪した人だから、誠に目に立たぬ特徴であつた。或は髪ばかりで無く、肌膚も雪のやうであつたと謂ひ、其は土の底に五箇年間、母の幽靈に育てられた爲だなど、傳へて居る。筑波山から小田に下る村の入口に、今でも一つの後生車がある。昔此傍で團子を買つて居た婆さんの店へ、毎日夕方になると二文錢を一つ持つて、團子を買ひに來た婦

人があつた。それが母親の亡魂であつたので、頭白は五歳になる迄、此だけの食物で養はれて居たと云ふのである(三) さうかと思ふと他の一方には、和尚は單に切殺された女の傷口から生れたとも謂つて居る(四) 兎に角に母の死んで後に生れたことだけは事實らしい(五) 而も其父母の名や年代に付ては、一定した説も無い。況や其事績として傳ふる所の物語の、區々であるのは怪しむに足らぬ。大體に於て斯様な人が有つたとすれば、足利時代の末の事であらう。恰も其頃に、野州長沼の宗光寺から、小田の城主に招かれて千光寺に坐つた名僧に、越後の生で舜覺法印と云ふ人があつた。若い時貧乏にして衣無く、寒天には土中に穴を掘り、藁を入れて住んで居た爲に、穴掘豊後と云ふ綽名を得た(六) 或は此人などに、色々の彩色ある衣を着せて見たのではあるまいか。

現今彼地方で行はれて居る頭白上人の話には、或は佐夜中山夜泣石の感化を受けたのでは無いかと思ふ、近代風の脚色が加はつて居る。但し上人の父の名を、筑波の東北佐

谷村の佐源治としたのが、若附合せて無いとするならば、注意すべき一つの點である。第二には團子を商ふ婆の小屋が有つたと云ふ地に、今も存する後生車なるものが、やはり無意識に傳説の由來を示して居る。後生車は又廻願車とも地藏車とも名け、地藏の御姿若くは尊號を刻んだ石の柱に、小な輪を取附けて路の辻に立てたものである。東北地方に行くと殊に多い。通行の人々此傍に立寄り、南無阿彌陀佛を唱へて其輪を廻すのである。無縁の聖靈に回向させる爲で、新佛の供養の爲に建てる者が多く、殊に稚兒を喪つた親たちが、地藏菩薩の御救を祈り、其柱に簀などを吊して置くと、通り掛りの人々が小石を拾つて其簀に投入れ、結縁をして行く風習などがある(七) 此點は疑も無く、後に言はうとする塞の川原の石積と、同じ思想に根ざして居る。頭白の母の靈が此場所に於て秘密を現したのは、佐夜中山で旅人が死んだ婦人の子を拾つたのと、至つて近い因縁になるのである。第三には頭白が後に仔細あつて小田天菴に殺され、佐竹の屋

形に生れ更つて、終に小田家を滅したと云ふ點である。掌に頭白上人と四字を書いて埋めた處が、生れ變つた赤子の手にも其文字があり、上人の墓の土を取寄せて、洗つて見たら落ちたと謂ふ。同じ人の奇瑞にしては、後先に似た話で煩はしいが、是は今でも一般に行はるゝ俗信であつて、やはり此土中誕生の話と關係がある。

三 土中出誕の僧たち

死したる母から子が誕れると云ふことは、殆有得べからざる話のやうであるが、決して我邦に於て始めて始めて其例を見出すのでは無い。支那にも古くから、全く同様な話がある上に、其又一つ前は早く漢譯せられた佛典の中に、やはり塚の中で生れたと云ふ旃陀王子の物語があるさうだ(八) 而も日本の方でも久しく此説はあるので、必しも博識且横着な一二の佛徒が、そつと之を燒直して置いたとも認められぬ事情がある。其だから私は面白いと思ふのである。寺の縁起などは成程自然に相似るものではあるが、其間にも基が無かつたら、さうは成るまいと思ふ變化がある。先懸離れた例から述べると、安藝の宮島光明寺の上達上人は、墓の中に啼く聲を聞いて、掘出した小兒である。母の靈に日々飴を買つてしやぶらせて居たと傳へて居る(九) 伊豫では西宇和郡の龍潭寺に、俗に幽靈和尚と云ふ名僧があつて、是亦母親の六道錢で求めた飴に養はれた。土地の人は他所のは此を訛傳したもののやうに思つて居る(一〇) 陸中稗貫郡の大興寺村に、如幻塚と名くる塚があつた。大興寺第九世の宿鷲充葦和尚、或時此邊を通れば、古墳の中にして赤子の啼聲がする。乃從者をして之を開かしめ、一人の幼孩を得、收め還つて養育す。長

するに及んで俊秀群を抜き、終に第十世の如幻充察和尚と爲つた。跋にして行道するこ
と能はず、仍て坐して修する一派の流派を開いたと云ふ。此寺は邊土ながら洞宗の巨
刹である。或は北陸の雲水などが、次に言はうと思ふ通幻の話を持ちて來たのかも知れ
ぬ。土人は此塚を湯殿行人の行人塚だとも謂つて居る。さすれば赤子の此塚から出たの
は、愈幻の如き言傳である。行人が塚を築くのは、毎に埋葬の爲では無かつた。

右様の縁起を傳へる名僧は、別に特定の宗旨には限られて居らぬやうである。例へば
時宗の一派、京都東山道場の開祖に就ても、同種の物語が最古く流布して居た。但
し此場合の變化は稍大く、大智識と爲つたのは穴子では無く、他の話に於ては小な役の、
幽靈の夫、赤子の父が之に當つて居る。どうしてさう變化したかは考へて見れば判る。
國阿上人は所謂晩出家である。俗名は橋崎の國明、播州橋崎庄の領主であつた。伊勢
國丹生庄御退治の軍に加はり出陣の間に、都に置いた妻女、懐胎中に病んで死んだとの

計があつた。陣中で供養の業に便ならぬ故に、只日毎に三錢を非人に施すのみであつた
歸洛の後蓮臺野の墓所に詣ると、不思議な塚の中で赤子の鳴聲がする。茶屋の亭主の曰
ふには、此頃幽靈とおほしき婦人、毎日三錢を持つて餅を買ひに來る。中程二日絶えて
後復來ると云ふ。其塚を開かしむるに、母の屍は既に朽ち、赤子のみは恙なかつた。二
日絶えたと云ふ日は、仔細有つて施行をし得ざりし日であつた。此因縁に驚いて忽發
心し、縁起が出来る位の偉い傳道者とは爲つたのである。(二三)

立入つた批評を避け、さつと話の表から感じたゞけでも、今時の奥様方には、赤坊に
餡餅團子などを食べさせるとは、如何に幽靈でも無法な事と、きつと眼を圓くせられる
であらう。其ほど不自然な二つの分子が、此話の中には假に組合つて居るのである。詳
しく申せば、赤子の啼聲を聞いて塚の中に之を得たこと、幽靈が供養の錢で子の食物
を調べたこととは、もと土中誕生の一點が似て居た爲に、同じ器に盛つて見たゞけで、

後の方は疑無く唐物である。閑居録に有ると云ふ姑蘇の鬼官人の話などは、食品と云ひ墓の構造と云ひ、日本の生活には合はぬ處がある。書籍に拘泥した五山僧などでもなければ、平民等には移植接木の企てられぬものである。そこで先此分はよい位にして置いて、残の部分をもう少し考へて行きたいと思ふ。

四 桑原の欣淨寺

曹洞宗では通幻派の開祖、通幻寂靈和尚に此と同じ話が有つて、而も飴だの團子だのと云ふ面倒な行掛りが無い。和漢三才圖會に依れば、和尚は丹波の永澤寺の開山だと

ある。家は京都で清水の觀音の申兒であつた。誕生に先つて母邊に身まかり、之を古廟の側に埋めた處、往來の人輒もすれば此邊に兒の啼く聲を聞くので、後には父も又之を知り、塚穴を開いて見れば既に子が生れて居た。此子漸く成長して學問人に勝れ、叡山に登つて僧となる。後禪宗を慕つて、能登の總持寺の峨山和尚に隨從し、終に天下に名を揚げた。明徳二年に七十で遷化せられたとあれば、國阿上人の息子よりは百年ばかりも前に、此地上へは出て來た人である。

話が色々に變化して世に傳へられる一例に、些し枝路に入るのを我慢して、聞いて貰ひたい問題が有る。雷の鳴る時にクハバラクハバラと唱へることは、殆ど日本一般の風習である。見えて、何處に往つても略似たやうな説明をする。手近の二三の材料を列べて見ると、曾て雷神が落ちた時に、鍬又は桑の木で怪我をして懲りたからと謂ふのが一つである。日向の南部では、桑の木に鎌を掛けてある處に落ちて切られたと謂ふ。桑原と

云ふ村の人と、特別の關係があるから、と云ふのが他の一つである。下總桑原村の傳右衛門、筑波山に登つた時から雷様と懇意になり、以後彼の家へ折々雷が御茶を飲みに來る。一度などは急な夕立で茶の支度間に合はず、怒つて臺所へ七輪の湯を打撒いたこともあつたと謂ふ。桑原と云ふ村は至つて多いから、本家の桑原がどれか分らぬ。泉州桑原村の西福寺には、桑原井と云ふがあつて雷會て此に落込み、村民井戸に蓋をして出すまいとしたのを、重ねて落ちぬと云ふ約束をして宥された。其歴史を想出させる爲に、クハバラと唱へるのだとの説もある。而も此と九分通同じ話が、攝州有馬郡の桑原にも亦一つあつて、雷の落ちたと云ふ井戸の外に、雷の手形を捺した一枚紙を保存し、二度と來ませぬ證文だと稱して居る。墨の痕だけ見れば、猫の手の様でもあると謂ふ(二四)此桑原の方は寺の名が欣勝寺、和泉の西福寺に於て俊乗坊重源の法力を説くに對して、欣勝寺では右申す通幻和尚を以て、雷神退治の名僧なりとして居る。但し有馬郡には桑原と云ふ村は無い。小野村大字母子の内であると云ふ。道元和尙の弟子の通元和尙などと、文字も年代も違つて居るが、やはり土中誕生の話はある。道元會て此地を通行した折、新墓の下に赤子の聲を聽付け、掘出して育て、弟子にしたのが通元だと傳へ、即此國の住民として居るのである。山國で雷の畏は多かつたと思はれ、兎に角に通元と鳴神との關係は深かつた。是も各地で聞く話ながら、或人の葬に行列の上へ落掛つたのを和尚袈裟を脱いで投付け、雷閉口して退却したとて、端の焦けた古い袈裟が、其寺の寶物である。此袈裟を載いたので成佛しましたと、後に雷神夢の中に来り告げ、だから亦クハバラと唱へるのだとも謂つて居る(二五)

五 通幻禪師の故郷

通幻通元の二つの傳説は、二つ同時に眞實であることが六かしい。大體に於ては後の分に誤が多さうだが、只一點丹波の永澤寺とあるのは、三才圖會が正しくない。永澤寺は確に有馬郡の内、前に言ふ母子村に接して、現に村の名に迄爲つて居る。二國の境に近い爲に、丹波と間違へたのである。攝陽群談に依れば、有馬郡母子村の永澤寺、開祖は通幻禪師、俗名は永澤家光、因州磯崎の人なり、母懷胎の時死して土中に生む子也とある(二六)成長の後專佛乘に志し、薙髮して母の菩提を訪ひ、諸國の靈佛を巡拜して此地に到り、終に寺院を營み氏の名を以て永澤寺と號す。村里の名を母子と謂ふのも

同じ因縁に基くと記して居る。母子と云ふは元草の名である。三月の節供に蓬同様に餅に入れて搗くもので、此邊では其風習の起をさへも、通幻が母を追慕した故事に托して居るが、言ふ迄も無く誤である(二七)傳説から地名の出来ることは通例で無い。多分は此様な珍しい村の名の爲に、開山の和尚の記憶が、殊に濃厚に爲つたゞけであらう。

通幻を因幡の人と謂ふこと、是は出鱈目とは思はれぬ。磯崎と云ふ地はまだ知らぬが同國岩美郡浦富村の町浦住の香林寺に、其遺跡と云ふ地が果してある。元祿十一年に建てた石碑に、禪師母の骸より生れたまふ塚處とあり、其地を土葬神と稱へて居た(二八)因幡志の挿繪で見ると、土葬神の在るのは寺の本堂の右手で、大な榎の樹下に碑がある。さうして注意すべき事には、其「土葬神」の文字に、ツゲノサ井と假字が振つてある。耳で聞くと黄揚の道祖と聞える。黄揚は今では榎ほどには多く用ゐられぬが、東京近くの田舎でも、尙到る處道祖の祠の樹である。此木の特長は榎の如く高く延びず、繖傘

のやうに神座を覆ひ、枝の水平に指すことは、心有つて方角を示すかと思はれる點で、殊に冬に入つて萬木の落葉し盡した時、獨其縁を守る姿は、愈路を行く人の頼とする所であつたから、乃多くの道神の笠の樹であつたのであらう。榎を以て之に代へた後まで（一九）ツゲノサイの名が遺つて居たものとする、爰をツウゲンの生れた塚の址とする、半分だけの理由は判つたと云ふものである。他の残の半分、即道祖と赤子との關係の方は、是亦容易く説明することが能る。全體土葬神と云ふ文字が、古くから有つたものとも思はれぬ。サへ即道祖神の當字だらうと思ふ。近江國では湖水南の低地に、都葬司又は土葬司など、書いた小社が幾つもあつた。是も同様の轉訛であらうが、二つの地方の例を併せて考へると、道祖土が同時に村の墓地であつたことを想像し得る。近江では何も其地に塚があつて、或皇族の御廟所のやうに傳へて居た（二〇）此等は皆王子神の路の境に祀られた、舊信仰からも證明し得られる。差當つての問題は、要するに赤子の

啼聲の、所謂亂塔場から聞えたと云ふ話の爲に、どうして道祖神の信仰を調べて見ねばならぬかと云ふこと、私の話の筋から言へば、因幡の香林寺のツゲノサイが、如何して通幻和尚の生立の地を、爰と決定せしむるに有力であつたかと云ふ點で、之を追々に説き進んで行くと、稚い頃の我々が聞いて、始めて人の世の哀を學び得た、かの塞の川原の物語なども、必しもさほど陰氣なもので無いことを、明白にすることになるのである（二二）

六 佐夜の中山

越前武生の龍泉寺は、是も通幻寂靈和尚を開基とする寺の一つである。此地方の人

の知つて居た和尚の身上話にも、やはり兩立せざる二通の説があつた。共に必しも眞實とは認められたので無い。其一つでは或商人、丹波の山村に入つて、誤つて人の娘を殺した。娘は元々其男を愛して居たので、幽霊になつてから出て来て婚姻をした。其間に生れたのが非凡な童子で、後に通幻和尚になつたと謂ふ。第二の方の話は、通幻の母親身持であつて、遠州佐夜中山を通行の折柄、悪い浪人の爲に殺された。通幻は其胎内を出て啼いて居たのを、幸に通りかゝつた研屋に拾はれた。何年かの後に其研屋の店に、刀を研がせに來た浪人、何心無く佐夜中山の昔の事を語つたので、母の讎であることを知り、其刀を以て仇を討ち、それから峨山和尚の弟子になつた。其刀は今大野の土井家に在ると謂ふのである(二二二)二つともに口から耳へ運ばれた話のやうで無い。而も何と云ふ本に出て居たのか、例の通に或は曰くであるから、虚誕か誤かの見分が付かぬ。先小説と認めて置くのが安全であらう。

幸か不幸か佐夜中山は、東海道の眞只中に在つて、三百年間の旅人に知られ、少し此話も有名になり過ぎて居る。太田蜀山の紀行に依れば、その頃には峠の上の子育観音堂に於て、小夜中山敵打由來と題する、縁起とも小説とも付かぬものを出して居た。江戸の湯島へ持つて出て、開帳をした時にも大に出した(二二三)中には何が書いてあつたか、尋ねて見るのも張合が無いが、第一に此山が古くは佐益中山とも有つて、サヤであることと明白なるにも拘らず、殺された女を何の小夜姫とか呼ぶ美人と爲し、赤子が生れて石の上で啼いて居たので、其で夜啼石など、説明したものらしい(二二四)處が其から更に百數十年前の名所記には、又此とも異つた物語を載せて居る。要約して申せば、助けたのが此山に住む法師、仇を打つた場所は此國の池田、殺された女は日阪の者、其子は後に無間山觀音寺の僧と爲るとあつて(二二五)即通幻和尚と關係の無いことが確である。

夜啼石の縁起に至つても、覺束ない事だらけである。近年此路を歩いた新聞記者の繪

日記には、ごろりと往來に轉がつた圓い自然石を描いて、是が夜啼石だと謂つて居るが蜀山の紀行に於ては、峠の中腹に立つて居た南無阿彌陀佛の石を其だと謂ふ。何にしても赤子が啼いて居たとするには無理な石で、且又子育觀音堂からも少し離れて居る。其ばかりか古い道中記には、石の事が皆目見え、其代に夜啼松の話がある。ちやうど孕女の殺された場處と云ふ處に此古木があつて、之を削つて火をとほして見せると、只の子供の夜啼の癖が止むと信じて、往來の序に切取り削去る者が多かつた故に、後は枯れて根ばかりに爲つたとも謂へば(二六) 或は享保の中頃に雷が落ちて枯れたとも謂つて(二七) 是亦決して精確では無かつたが、兎に角に夜啼石の人に知らるゝに至つたのは、其享保の頃からの事である。始は只丸石とばかり呼んで居た。木は枯れ石は轉がつても、遺るべきものはどうしても遺るので、此變遷を逆に昔の方へ辿つて見ると、やはり此中山の本然の地形が、斯の如き物語を成長せしむるに適したことを認める。と言ふのは他でも無い。大井川は對岸の地勢上、昔も今の如く金谷島田の附近で渡らねばならなかつた。自然の水筋に沿うて此渡場へ出るのには、此峠を越えるより他に途が無いから、つまりは佐益の中山であつたのである。

甲斐が根をさやにも見しか心無く横ほり伏せるさやの中山

此歌は富士に分れて來た人の、天龍の平野で詠んだ歌であらう。實際はさうで無くても、如何にも此嶺一重で隔てられるやうな感じのしたのは、やがて又山の名をサヤと稱へた理由であつて、遠くの旅人には幣を奉る神、近い里人には里の守を禱る神が、尤其威力を耀すべき場處は斯様な場處、而して私の解して居る赤子塚の由來は、亦此種の神たちに對する、上代の信仰に他ならぬのである。

七 夜啼の願掛

佐夜中山では、夜啼石の世に顯れたのが、夜啼の松の枯れて後であつた。其松樹が夜啼の名を得た原因は、小兒の平安を祈る普通の親の情であつた故に、或は早合點をして塚から赤子の聲がしたと云ふ總ての傳説は、皆同種類の願掛の風習から、誤つて斯く信ずるやうに爲つたものと、考へる人が無いとも言はれぬ。併し路の畔に祀る神が、如何にして子供の夜啼を止める力を具へらるゝかの理由が、元既に不明である。書物で物を知る我々の如く、村人たちが名前だけに誤られて、斯な込入つた話を作ると云ふのも、亦有得べからざる事である上に、赤子塚赤子石の不思議は、決して啼聲ばかりでは無かつたのである。是も理屈を云ふよりも、色々の場合を比べて見る方が、話は却つて早い。又後の研究者に取つても都合が好い。

夜啼松の例は多過ぎる程有ります。其有名な二つ三つを舉げて見れば、伊勢では鈴鹿郡羽若の夜泣松、枯れて僅に朽株が有るばかり、其一片を取來つて火を點して見せると小兒の夜啼く癖必止む(二八) 備後絲崎の淡墨松も、此枝を燃して夜啼する子に示すときは効が有る(二九) 神功皇后の御船を繋ぎたまふ松と傳へて居る。豊後東國東郡池ノ内の夜泣松も同様であつて、唯其由來として傳ふる所、稍他の地方のものに異つて居る。大昔仁聞と云ふ高僧、行脚して夜此樹の側を通る時、赤子を抱いて樹陰に野宿して居る婦人を見た。其赤子大に啼いて困り切つて居るので、乃松樹に向ひ經を讀んで後、其落葉松毬を集めて火を燃し、光を赤子に見せると忽ち啼止んだ。此後泣くことが有らば斯せよと教へて去つたのが始で、今も此葉を持還る人が少く無い(三〇) 此話の世に遣つたのは何

人の口からであるか知らぬが、僧が子を抱いた婦人に遭つて、其苦を救つたと云ふ點だけは、通例ウブメの怪と稱して、人の説く話とそつくりである。ウブメは即産女であつて、女の産に臨んで命終つた者、子を抱いて娑婆世界を彷徨ひ、佛徒に言はせると回向をよくせぬと人に害をする(三二)さうかと思ふと人に福を授けた話もある。其ウブメが啼くと云ふことがある。啼く聲は嬰兒のやうで、闇夜に空を飛ぶと謂ふ所から、それでは烏だと云つて穿鑿の説を立てた人もあるが、そこ迄は此話を持つて行くにも及ばぬ。兎に角に頭白通幻の物語と、此世彼世の境を行く點に於て、相似たる母と子の話があるからは、松の火を點して夜啼する子を照す今日の慣習が、寧ろこの怪しい闇夜の聲よりも後に起つたものと解する方が正しさうである。

所謂夜啼の願掛は、祈禱と謂ふよりも寧ろ呪術である。唯或一定の地に在る松樹などに限つて用ゐる故に、次第に其樹を拜し、又は樹下に祠を構へるやうになつたのである。

松の木を専とする仔細は、勿論有ることであらうがまだ解らぬ。必しも火を點すからと云ふ譯でも無いらしい。豊後下毛郡土田の夜泣松は松葉を煎じて服ませ(三〇)飛驒の宮村の一松は其樹皮を、信州鹿鹽の夜泣松は其小枝を、子供の枕の下へ入れると夜泣が止むと謂ふ(三二)此等の松の木の本の所在は、土地の人に聞かぬと分らぬが、私は之を言當てることとが能る。きつと佐夜中山の如き峠の路か、然らざれば里の境、若くは川の岸、橋の袂などの、何でも往來の人々の、是非通らねばならぬ要處であらう。即ち是道祖神の祭場に適する處で、或は松も榎も立つて居らずとも、同じ願掛の爲に用ゐらるゝこと屢である。橋で言ふならば東上總の行川村の夜啼橋、一跨ぎに足らぬ堀に架けた橋なれども、願を掛けるときは自然と夜啼が止むので、小な繪馬がよく上げてある(三三)伊勢では多氣川の再拜橋、勅使參向の折に架けた橋である。此橋杭の残つて居るのを削つて、やはり小兒夜泣の呪法に用ゐる効があつた(三四)東京でも神田の小川町、もと松平伊豫守屋敷の前

に、夜啼の願掛をする井戸があり、慶安年間に將軍家でも之を試み、其後も之に倣ふ人が多かつた(三五) 其名を三辻ノ井と謂ふから、多分今も有る三辻であらう。麴町には六七丁目の境にあつた柳橋と云ふ石橋に、夜泣の願を掛けて居た(三六) 常州土浦在の殿里では石橋の上に赤子の右の足跡と謂ふ窪みがあつて、此に溜つた水を夜泣の兒に飲ませる。此村にはおまん塚と稱して、昔美しい嫁が死んで祀つたと云ふ話がある。橋の石に跡を遺したと云ふ赤子は之と關係があるやうで、爰にも母と子との靈が纏綿する。左の足は筑波山下の神郡に在るとも謂つて(三七) 片足は頭白の後生車にも掛り、更に他の一方には、此から話さうとする足形石の方へ、果も無く其小な跡を曳いて居るのである。

八 赤子の聲と石

通幻寂 靈和尚を開山とする寺に、更に下總國府臺の總寧寺がある。但し此寺は最初は此地に立つたので無い。天正三年に近江の番場から下總の關宿へ北條家が移し、其から又九十年後の寛文三年に、今の處へ引越して來たにも拘らず、猶夜啼石の因縁の、附いて廻つて居るのは意外である。享保二年の十月二十三日と、其石に彫つてあるのが發見の時であらう。此寺第二十八世の住職某、後の山に鬼哭の聲を聽き、其處を覓め地を穿つて此石を得た。仍て塚を作り供養をしたら、其啼聲が止んだと謂つて、石は卵塔場の中に、蓮華座に据ゑて今でも置いてある(三八) 高さ二尺ばかりの青色の石で、人の蹲

つた形をして居るとは謂ふが、兼々石は啼くものだと言ふことを知つた人で無ければ、一寸見付かりさうにも無い探し物であつた。泣かぬ者を木か石かなど、世間では云ふが其石が泣いたのだから只事では無かつた筈である。いくら通幻禪師の開いた寺でも、さも有るべしとは言つて了はれぬが、今迄は別に大なる問題ともして居なかつたやうである。夜啼石は固より佐夜中山ばかりに在つたのでは無い。土佐の梅木村、伊賀の夙村などにも同じ名の石が有り、又近江の金勝山にも泣石があつた(三九) 石工が来て研らうとする、嬰兒のやうな聲で泣いたと云ふ石も多い。備後の東法成寺村の赤石などが其である(四〇) 肥後の阿蘇山では噴火口の周に、皿石と稱して皿の形をした熔岩の塊が落散つて居る。小いのは徑二寸内外の物もある。之を拾つて歸るのは必二箇以上でなければならぬ。唯一箇であるときは、夜啼いて自割れるからと謂つて居る(四一) 是も近頃の経験であつたが、越前吉田郡中角の字多知に、朝倉氏の家人乙部某の館趾と云ふ地がある。館の主の世盛に、庭の石だつたと云ふ大石の残つて居たのを、村の光福寺まで運んで境内に入れた處、毎夜泣聲を立てるに因つて、再之を元の地へ還したと謂つて居る(四二) 是明治三十年前後の出来事である。三百餘年の永い月日を、黙々として過して來た石が、卒然と啼出したと云ふはそも何事を意味するか。學者で無い人たちの心の奥底に、兼て石にも魂の宿るものがあることを、知つて而して將に忘れんとして居たのが、縁に附いて一度明になつた爲と、認めるより他は無いやうである。

石何が故に啼くかの説明の、幽に傳はつて居るものはやはり佐夜中山に似て居る。例へば羽後の仙北郡では、峰吉川村字根岸の五十日子石一名ニガコ石、路の側に在るが、昔は毎夜乳子の聲をして啼いたと云ふ(四三) イカ又はニガは赤子の聲の形容である。同郡半道寺村の哭澤にも、此と全く同じ話があつた。其外にも此附近には、土の中から赤子の聲のした噂が至つて多く、何も之を八幡太郎の子とするに一致して居るらしい。歴史

を無視したやうな説ながら、義家安倍氏を攻めて此地で永々の對陣をした頃、貞任の娘で花のやうな何姫、敵の若大將を慕ひ、夜深き山路を往來する間に、終に顯れて父の怒に遭ひ、生理にして殺された。其時産の前であつた子が、或は後に生れて父に助けられ或は靈と爲つて永く其地に止まり、或は村人之を悲んで神に祀つたなど、話は幾通にも傳へられて居たが、要するに赤子は路の傍で啼いたのである。而して此に我家の子供の夜啼を禱る風習があつたか否かは、まだ私は確めて居らぬ。

九 神に祀つた赤子

東京近くでは、世田ヶ谷の十三塚に關聯して傳へた昔話が、如何にもよく安倍家の姫の話と似て居る。世田ヶ谷の城主吉良左兵衛佐頼康に、十二人の側室があつた。奥澤の大平出羽守が娘常盤、十三番目に迎へられて出て傳き、寵愛世の常で無かつたので、十二人の女心を合せて之を嫉み、詞巧に讒言をして終に常盤を殺させた。常盤の死んだと云ふ場處は、駒澤村に境した往來の石橋の畔で、其南手の畑の中の塚を、常盤塚と稱へて居る。橋の名も常盤橋と呼んで居たが、今では地名ばかりが残つて居る。以前とても水涸々の堀溝であつて、物々しい傳説には似つかはしく無かつた。常盤姫の斬られた時、生れたのは亦男兒であつたが、是は直に死んだと傳へられる。吉良殿後に其罪の濡衣であつたことを覺り、殊に若の命を徒爾にしたことを悲んで、日頃信する馬引澤の八幡の社内に、此男兒を若宮八幡と稱へて相殿に祀り、常盤をも其傍に祭つたのが、今の辨天社である。十二人の罪ある女は死罪に行ひ、右の常盤の塚に續けて若林村から

上馬引澤へかけ、十三の塚を列ねて之を埋めた。近世土人の此塚を開いた者、女の手道具鏡の類を、多く掘出したと謂ふことである(四四)

江戸の草冊子の影響を、此程著しく受けて居る話でも、尙十二人の侍女など、有得べからざる事を説くのは、即古來の傳説に基いた證據の一つである。斯云ふ例を見た上で考へると、例へば木曾の黒川村の小子塚の如き、木曾殿の若君で其長僅に一尺二寸、白に隠したの笠で覆へば見えなかつたのと言つて(四五)而も里人の永く之を畏れ敬つて居るものが、最初は小子なるが故に特に之を塚の神とする理由の、有つたことを想像せしめる。里人等は先自其理由を忘却し、名も無い小兒を祀るわけが無いと思つて、僅に存する信仰に色々の修飾をする。是が現在諸國の舊傳に變化があり、其比較の興味深き所以である。一つく聞けば何とも解らぬ話が、列べて置けば後の研究に用立つであらうと思ふのも此爲である。大隅牛根村居世神社の社傳に、大昔十二月二十九日の夜、

此處の農夫渚に出で、潮を汲まうとするに、闇の中に嬰兒の啼聲がする。火を照して之を見れば、空船に七歳の童子乗給ふ。欽明天皇第一の皇子、雪ふる庭に出で、土を踏みたまふに因り、最早九五の御位に即かされたまふべからずと、空船に乗せて海に流し奉ると謂ふ。農夫たち之を撫育し奉るに、十三歳にして隠れたまふ。廼此社に齋祀つた云々(四六)歴史として信じ難い點の多いことは言ふ迄も無いが、つまりは神の御子をも王子と謂つたのを知らずに、欽明天皇の御代と傳へたのを、直に其皇子の如くに誤つたので、此も亦神最初の出現を歌つた、古い物語の破片である。空船と謂ふのは、蓋が有つて波の入らぬ船のことで、前代日本人の空想の潜航艇であつた。此世と海の國との交通が、神様ばかりに專屬するやうになつてからは、空船は即神の御船であつた(四七)師走二十九日の夜の潮汲と謂ふのも、神を迎への物忌で、偶然の遭遇で無かつたことは確かだが、此等枝葉に亘つた問題はどうでも可い。爰には唯闇の夜に兒の泣聲を聞いたこと

と、松明の光を以て尊い王子の御姿を照し見たと云ふことゝが、私の話に關係のあると云ふだけを、述べて置けば其で十分である。

10 啼地藏、啼薬師

三百年以降の縁起の中にも、猶神主僧侶等の見識だけで、棄てしまふことの能なかつた古い話が、些しづゝ遺つて居るのは面白いことである。彼等は衆生を濟ふ爲とならば、随分虚誕も書かうと云ふ覺悟はして居たが、而も現に存在する口碑を無視することには、土地の故老が承知しなかつたものと見える。だから氣を附けて讀んで見ると、大隅

居世神社の社記に、嬰兒の啼聲を聞いて、七歳の王子を見たと有るやうな、調和せぬ點が幾らも出て来る。我々は砂金を淘る人と同じ忍耐を以て、埋れんとする寶を取留めねばならぬ。野州葛生の小藤神社は、祭神を天兒屋根命と稱しながら、御神體は一箇の玉石である。足利時代の末に、佐野の藤阪與三と云ふ士、夜深く此邊を通つて赤兒の泣聲を聞き、棄兒かと思つて聲を辿つて尋ねたが見えぬ。よくよく探れば些やかな玉石から泣聲が出て居るので、不思議に感じて之を神體として一社を建てた。其社の名を小藤と謂ふのは、藤阪峠の藤の字に、小兒の小的字を結合させたので、家の祖神の兒屋根命を以て、此石體の神靈として崇敬したと謂ふ(四八)どう云ふ理由で赤子の聲をきき、及小兒の小的字を採つたかは、説明し得る人がもう無いらしい。

尾張國の六地藏の第二番、丹羽郡小折の常觀寺の地藏は、邦に異變ある前には汗を流して、之を豫報すると云ふ靈佛であつた。昔盜人之を銅像かと思つて、盜出して讚岐國

まで背負うて行き、不思議に遭遇して懼れて之を江の濱に棄てたとある。多分石地藏であつたのだらう。後に其地に毎夜の光物があり、又赤子の啼聲が頻に聞えた。地藏盜賊は遁がして置きながら、縁も無い或下人に憑いて狂はせ、元へ返さぬと崇るとわめかせたので、早速葦葦の中から捜し出して、尾州へ送届けて來たと謂ふ(四九)讚岐高原天神の神官が、奇瑞に感嘆するの餘、鰐口を送つたなど、謂ふのは、其鰐口が在るから出來た話で、實はさう遠方での出來事では無かつたやうである。何にしても赤子の啼聲までは此場合には不用のやうに思はれるが、其でもやはり啼いて居る。此なども夜啼地藏の多い例から推論して、もと地藏に小兒の夜啼を止める祈禱をしたのが、轉じて御自身啼かれたものゝ如く、誤つて傳へたと言ふ人もあるか知らぬが、實際は佛像の啼いたと云ふ話の方が古くから有る。

又子育の御誓願は無い他の佛も啼かれた。鎌倉扇ヶ谷の扇谷山海藏寺、源翁禪師の開

基である。本尊は藥師如來、俗に之を啼藥師と謂ふ。相傳ふ昔此山の土中に、夜毎に兒の啼聲があつた。開祖の禪師之を恠んで行つて見ると、小墓あつて金色の光を放つて居る。乃袈裟を脱いで其塚を覆へば、啼聲は止むたとある。其地を掘れば藥師の木像の首ばかりが出た。仍て別に一體を造つて、其腹籠りに感得の佛の首を入れたと謂ふ(五〇)此などは短いけれども二つの話の結合である。佛の木像を見出すだけの爲ならば、わざわざ袈裟を着る迄も、脱ぐと云ふ理由が無く、又藥師の聲ならば、斯して之を止める必要も無かつたので、此方は寧通幻禪師の火車退治に近い話が、後先に有つたのでは無いかと思ふ。

一一 赤子の足跡

丹後の橋立の成相寺の鐘は、撞くと子供の啼くやうな音がした。勿論今は如何であるかを確かめて居らぬが、此にも亦哀な母と子との物語があつて、其は鐘鑄の當時に、參詣の一婦人誤つて、抱いた赤兒を鎔銅の中へ墮したからと傳へて居る（五三）怖い話であるが例の多い事で、稀には魔障有つて鐘のどうしても成らぬ場合に、慙と投込んだとさへ謂ふものがある。外國では大なる建築の地形や柱立に、往々にして小兒が牲と爲つた話を聞くが、此は日本には少いやうである。唯一つ近世の事で、而も東京を去る遠からざる八王子の大善寺に於て、本堂建立の折に柱の下敷に爲つて、死んだと云ふ稚子の話がある。

堂の前の右手の柱に、其子の爲と稱して小さな足跡が彫つてある。人皆來つて手探り見る故か、滑に手磨れて光つて居ると、百年前の實見者が記して居る（五二）足跡を彫刻して記念とする風習は、小兒に就ては外に聞いたことも無いから、果して傳説の古來のものなりや否を決することが能ぬ。二百四十年程前に上野の清水の觀音堂で、不意に天井の板に、人の足形が八つほど附いたことがあつた。此は革足袋か何かに泥を附けて、下から捺したのかも知れぬと云ふことであつた（五三）大和の大三輪寺では本堂の丑寅の隅に子供の足跡板の上に残り、今も暖であるなど、取沙汰をした（五四）三輪明神里人の女に住ませたまひ、生れたる子の足跡であつて、十歳にして成佛をしたなど、謂ふ。三輪が人間の女性と婚姻せられた話は、古く且有名ではあるが、未此様な御子の有つたことを言はぬ。又其足跡と云ふのが隣の寺に在るのも了簡に及ばぬ。何となれば此事件は、佛法渡來よりも幾ら古いか知れぬからである。尤中古には又別様の説もあつた。此神が女

神で伊勢に在つて獵人と夫婦となりたまひ、男兒を儲けて後、伴つて三輪の社殿に還られたなど、謂ふのは其一つで(五五)何を混同して斯様な奇談を生じたかは知らぬが、つまりは此地方にも兒神の、跡を人間に留むるもの、不思議の足跡を以て闇夜の啼聲の代とした例の、存することを見るのである。

而して人が作つたもので無いならば、此足跡は既に久しい昔から、我々の祖先を驚して居たのである。例へば延長七年の四月二十五日の夜、宮中に鬼の足跡を發見した。色は赤を交へた青色で、牛の跡に似て居た。此と入亂れて幼き者の足跡もあつたと云ふ(五六)是今より九百九十年以前の事である。近代に在つては駿府城内の料理の間で、圍爐裏の灰を毎日とくと搔平して鎖を下して置くのに、翌朝行つて見ると小兒の足跡の附いて居ること多く、現に見たと云ふ人が之を話した。此も一尺許の大人の足跡と伴ふことがあつた(五七)石見國では此様な足跡を水虎の所爲として居つた。初夏に泥を搔上げて

水田の畔を塗つて置くと、時として二三歳の兒の足跡が附いて居る。併しよく見ると此足は、踵の方も細く尖ること鳶口のやうである上に、水邊の砂の上にも此足で歩いた跡がよく有るから、見た者は無いが河童に相異ないと云ふ(五八)陸中遠野などの河童にも同じ話があつたが(五九)、此等は皆河童其物の素性を確定した後でなければ、異説とも同説とも言ふことが出来ぬ。

〇一二 塞の河原

同じ種類の不思議が、場處を定めて現れる例がある。箱根の塞の河原などは正に其一

つで、此も街道上下の衝に在つた爲に、佐夜中山の如くよく人に知られて居た。但し
外國人の紀行に寫眞まで出た今の塞の河原は、元和の初年に荊湖の南を通るやうになつ
てから、引越して來たもので、爰にも多くの石地藏と、小石を積重ねる風習とはあるが
私の言はうとするのは元箱根の舊道、權現坂の邊にあるものである。此山中には右の
新舊二箇處の外に、姥子にも亦一の塞河原があつて、六地藏外十一の石地藏があつたが
獨元箱根の上に在つて、或は誤つて曾我兄弟の墓などゝ謂ひ、鎌倉末頃の年號ある二三
の石塔も立つて居る、所謂元塞河原の地だけに、此話は有るのである。官道が南へ遷つ
から後も、毎年七月の二十三日には、近郷の人々此へ集り來り、地藏の供養をした。夜
更けてから子供の幽霊が出ると云ふ話で、翌朝見ると必其足跡が有つた(六〇)或は又此
夜には限らず、時々小兒の足跡を見ると云ふ説もあつた。さうして實は獼猴の足痕だと
も言つて居る(六一)成程人散じて食物などの落散つた處だから、猴なども出ぬとは言はぬ

が、少くとも其足跡を見て、小兒の幽霊を心付くだけの事情はあつたのである。其は手
短に申せば塞の河原と云ふ地名である。日本では噴火などの怖しさに基いたものか、高
山には屢此世の地獄を説いて居る。越中立山に地獄ありと傳へたのは、最古の記録で
あるが、富士にも白山にも同じ話がある上に、北は外南部の宇曾利山から、南は九州の
鶴見阿蘇雲仙等に至るまで、今あるものは多くは新しい火山である。塞河原が其一部分
として存するだけならば、話は至極簡單であらうが、よく注意して御覽なさい。此は割
合に數多く、又弘く平野地方にも分布して居る。此は塞河原が素佛教の地獄の中で無か
つたこと、誰が作つたかは未知らぬが、淨土和讃の物悲しい章句に(六一)
三つや五つの稚子が、塞の河原に集りて、晝の三時の間には、大石運びて塚に築く。
夜の三時の間には、小石を拾ひて塔を積む。一つ積んでは父の爲、一つ積んでは母

の爲……………

などあるのは、歴史にも經文にも、些でも所據を持たぬ創作だと云ふことを意味するもので、其が民心を動し了つた今日となつては、出鱈目と否とは問題で無いか知らぬが、兎に角に此和製の地獄には、やはり國産の原料が、うんと入つて居ることは認めねばならぬ。

だから又能登の波竝村の海添の路に面して、地藏堂の前に小石を多く積んだ才の川原などでは、毎夜子供の多く啼く聲がすると謂つたのである(六三) 信州飯綱山の御頂上の宮の脇に、例の粟飯の出る處を西の河原と謂ひ、笠を伏せると五六歳の子供の足跡が附く(六四) 笠を伏せるとはどう云ふ次第か分らぬが、やはり通幻源翁の袈裟、及木曾の小子の笠で隠した類では無いか。他の地方の塞河原でも、岩の上に子供の足跡の永久に残つた例がある。甲州菩提山の路に在る關の地藏堂の前の大石(六五) 又は次に言ふ越後の浦ノ濱の角田の洞穴などは其であつて、元々明燦に足跡と決定し得る程の凹みでも無いのを、言合せたやうにどの田舎でも、人が意を以て迎へてさう取るのは、どうしても底に横はる古い信仰のある爲で、私だけは塞河原と云ふ土地の人の稱が、よく其由來を説明するやうに思つて、此話をして居るのである。

一三 石を積む風習

越後には殊に路傍の塞河原が多いが、前に舉げた角田の洞穴などは、國上山へ抜けて居ると謂ふ位の深い穴で、七面明神出現の地なども傳へて居る。奥深く入ると數多の小石が、誰積むとも無く累々として、夜毎に其位置が變るとさへも謂ふ(六六) 子供の足

跡ぐらるは附いて居さうな處だ。信州和田峠の麓に在る道祖河原なども、路の左右に小石を何箇處とも無く積重ね、旅人之を崩せば夜の間に又元の如く、積んであると謂つて居た(六七)精密な實驗で無いことは勿論ながら、少くとも志して積むと云ふ迄の人は無いのに、斯云ふ小石塚が出来たのである。奥州では有名な恐山の地獄谷に、拳ほどの小石を集めて塔を作つた處を、又賽の川原と呼び、幾百とも知れぬ其塔が、崩せば又何時と無く元のやうになると謂ふ(六八)更に海峽を渡つて渡島の横泊の浦にも、石子積と名けて同じやうな處がある(六九)後志の川白崎にカムイミンダラ即神庭と稱へ、晝崩せば夜は又元の如く爲る積石があつて、日本の水夫等之を西院河原と呼んで居た。今ではもう出来ぬと言ふ(七〇)此の如く物遠い蝦夷が島でも、尙我々の祖先が見れば塞河原であつた。而も九州の果に行くと、此話は及ばなかつたと見えて、大隅田代村の鵜戸権現社の窟の口には、時々石を積立てゝあるのを、此御神に従屬にするカハタロの仕業と信じて居た

(七一)カハタロは又河童のことで、此窟に住んで居たのである。

佐渡の外海府の願の賽河原などでは、此現象を以て自然の力の如くに、土地の人までが認めて居た(七二)成程企てゝするので無いから、弘い意味では自然かも知らぬが、路傍に在る者などは多くは人がしたのである。戸山學校西南の三辻、内田外相邸の角に在る地蔵の前では、現に只の子供が小石を持つて來て置くのを私が見た。旅をして知つて居る各地の塞河原の中でも、遠州奥之山街道の烏井河原邊で見たものは、一度水が出ると流されさうな中島に、成るだけ平い石を拾つて、五段も六段も重ねて居る。近く兒を失つた父母が此路を通ると、悲しくなつて思はず斯すると、處の人が話したことである。箱根の峠の如きは、誠に浮世の衢であつた。だから元和以來の新店の塞河原にも、尙念佛を申し石を積んで、通る人が極めて多かつたのである(七三)併し今一つ前に溯つて、元箱根の権現坂に在るものなどは、時を定めて人が供養に集まつて居た。越後北蒲原の

華報寺參詣路の塞河原に至つては、石を積んで早世の者の菩提を弔ふ爲に、毎年四五月の間里人等群衆す。寺の僧は此頃を期して出て水施餓鬼を行ひ、又豫て職人をして薄い板の小塔婆を作らせ、之を多く賣つたと云ふ(七四)さうして如何なる理由で石を積むのかは、僧も信徒も實はよく知らなかつたのであるから、民間因習の強い力は、又之を天然と呼んでも誤で無かつたのである。

一四 道祖と地藏

會て盛岡の新聞記者が、郷里の秋田縣へ還るに、鹿角の山道を越えて往つた紀行があ

る。湯瀬の温泉の近くで、道祖神の祠の在る塞神平の地に、此積石の散點して居るのを見て、余も無意味に一組を積みたりと語つて居る。但し新道の開鑿以前、旅人此邊の難路を地獄の一丁目などと呼んだ處から、例の塞河原に見立て、石を積んだのだらうと言つて、自分で之を下らぬ考と評して居るのは面白い(七五)奥羽には陸前柴田郡關山の地藏原を始として、旅人の石を積んで行くこと、恰も頭白上人の條に擧げた地藏車の策と同じく、佛法で説明し得る塞河原が随分有るが、而も其地名の道祖神に起つたことを、知つて居る者が多かつたらしい。之に反して關西の山村には、峠の道祖祀などと呼ぶもの、各郡に二つ三つも有つたに拘らず、此と淨土和讃などに取込んだサヒノカハラと、同じ起原なることに心付いた人が無い。従つて京都西南の佐比里が、共同墓地で人よく之を知る處から、子供の地獄の名としたとか、甚しいのは石を積むことが双六の賽に似て居るから、戯にさう呼ぶのだなども謂ふ(七六)双六で積上げるものは賽では無い。又さう

だとしても、やつぱり石を積む風習の元は分らず、又何故に地獄に其様な區域が有ると考へ始めたのかも分らぬ。私の思ふには、支那で道祖と謂つたのは單純に道の神であつたかも知れぬが、此漢字を宛てた我邦のサへノカミは、同時に境を護る神様であつた(七七)サへは即塞障のことで、障る遮るなど何じ語原から出て居る。故に之を祭るには村の境、山の峠又は橋の袂の如く、人間が防衛するにしてもやはり好都合な、通路の一點を擇んだのである。中國などでは道祖神は、石でも瓦でも多い方を悦ばるゝと謂つて、やはり其前を通る人たちは、其類の物を携へて往つて積重ねる。或は最初は神様の防禦工事の手傳の意味であつたのかも知れぬ。さうで無くとも少くも佛教とは關係が無かつた。佛教の些も行はれぬ外國の蠻地にも、山路を越える者が小石を持參して、一定の地に積むと云ふ土俗は多い。又樹枝を積む風もある。此も日本で花立場或は柴塚など、謂つて、やはり往々する事である。此類の作法の至つて古いものは、當人自身にも

何の爲にするか、確と説明の出來ぬ場合が有るので、従つて色々の教が之を我方へ取込むは普通であるが、幸に我邦ではサへと云ふ昔の語も残り、之に伴ふ信仰の一部分もまだ行はれて居るから、もちつと研究して見たら、世界的にも此奇風俗を解釋する端緒を得るかも知れぬ。

塞河原の道祖信仰から出たことを證據立てるのは、決して語ばかりで無い。日本の地藏様と道祖神とは、似ぬ點が少い位よく似て居る。眞言一流の説明では、地藏は道祖神の本地、道祖は地藏の垂迹であつた。殊に子安地藏とか子育地藏とか謂つて、永久に人の親の憂悲を救ふ役目は、道祖神も又古くから之を掌つて居た。法躰の地藏には似合しからぬ縁結びや、生れる子供の運を定める仕事などは、素より道祖の管轄する所であつた。だから或地方の塞河原で、地藏堂の前に小兒の啼聲足跡があると共に、佐夜中山や因幡の黄揚の道祖に於て、夜啼石や塚から子の生れた話が遺つて居るので、後世の

民が歴史を悦び偉人を慕ふの餘、出来るならば誰か名の高い人の事にしやうとした爲に
そんなに似た話が幾つもあるものかと、互に他を輕蔑するやうな事にはなつたが、今一
つ以前に戻つて考へると、何か我々の祖先が、石のごろくくと有る境の神の祭場附近に
於て、深夜赤子の聲を聞き、岩の上に其可愛い足跡が留るやうに、思はねばならぬ事情
が有つたのでは無いか。此が私の大問題である。

一五子 捨川

縁兒と其母とを神に祀つた例は、探せばまだ澤山に有る筈である。遠江でも西部の天

龍流域に、羽後とよく似た八幡太郎の御落胤の話があつた。但し此方では兒の母を水神
の姫とした爲に、我々が感ずる物語の興味は、全く別様のものとなつて居るが、其根元
に於ては恐くは一つで、斯る覺しい逸話を此英雄に誣ひたのも、實は八幡大神出現に
關する古い神話を、傳へ誤つたものであらうと思ふ(七八) 勿論近世の信仰に於ては認めら
れぬ事であるが、此神は人間を母とし、天の神を父君として誕生せられた、最尊い御
子神だと傳ふる説が曾てあつた。さうして其御母の名を、玉依姫と申上げたらしいので
ある。従つて宇佐男山では既に、應神天皇の御事と確定してしまつた後まで、地方に由
つては尙神が王子を世に降したまふ話を信じて居て、やはり能ふ限之を記録の歴史と合
せやうとしたのである。其一つの結果が、用明天皇諸國巡狩の口碑であつた。何故に特
に用明天皇であつたかと言へば他でも無い。人界に在つて最優れたる王子、厩戸皇子
の御父であつた爲で、西は豊後の眞野長者の愛娘の因を以て、所謂山路の草苜笛の、夢

よりも美しい物語の種を作り、北の國では奥州の刈田の宮に、子葉川の舊傳を留められたのも、共に巫女の神道の盛であつた名残なること、殊に兩處の御息所が、共に玉世姫であるを見ても分る。刈田嶺神社の方では、俗に神の名を白鳥大明神と稱へまつり、今以て鶴を崇敬すること世の常で無い故に、机の上で之を日本武尊に變更せんとした學者もあつた。他の田舎では特にさう訂正して、尤らしくした社もあるか知らぬが、少くとも刈田では成功しなかつた。此御神の白鳥は、用明天皇の御妃王世媛、薨じて後之に化したまふとも謂ひ、僅上流の長袋村の兒の宮に於ては、玉世の棄てたまふ若宮、此鳥と爲つて飛びたまふとも傳へて居る(七九) 兒の宮は奥州街道の側、白石川の一支流の、落合に近い土橋の袂に在つた。其川の名は傳説に因ある子捨川、一に又兒投川とも謂ふらしい。而も何故に棄てられたかは明白なる説明が無い。只日本の英雄口碑に必附いて居る、上臈の夫を慕つた話の面影を見るばかりである。

右の舊傳は、其郷土に於て既に統一を缺いて居る。詳しく始末を尋ねやうとすれば、きつと作り事が交つて來るに相異なる。而も幸に成長の地が田舎であつた御蔭に、無責任なる文學の染返しに遭つて、元の綱目も分らなくなることに、京の兒捨馬場の話の如くでは無かつた。兒捨馬場は上賀茂の南の方に在つた。今は其地を知ることが出来ぬ。平家都落の騷の折に、平敦盛の隠し妻で大納言資方の娘、まだ襦袢の中なる稚兒を此處に捨て、黒谷の法然上人が拾上げて育てた。斯云ふ話が傳はつて居たのである(八〇) 然るに謠曲が之を取上げて大に育てた爲に、どの部分までが古くから傳へた事か分らなくなり、其以前には更に法然の徒弟たちが、我兒の如くに愛撫して居たので、法師や戯作者の力では、丸々根本から作上げることは能なかつたらうと云ふ以外に、之を頼にして話を進めることが六かしくつなてしまつた。

一六 子敦盛と下り松

兎も角も謠の生田敦盛では、斯云ふことになつて居る。黒谷の法然上人、加茂に參詣しての歸途に、下松の樹下に美しい緑兒を、手箱の蓋に入れて捨て置いた者がある。上人不便に思はれ、抱き還つて十歳餘になる迄撫育せられた。或時説法の序に於て此事を語るに、聽問の群の中から若い女性が出て、其は自分の子であつて、父は平家の敦盛と告げたので、童子は亡父の戀しさに堪兼ね、賀茂明神に祈請して靈夢を被り、終に津國生田森に下り向つて、敦盛の幽靈と逢ひ且語つた。

シテ「うれしや夢の契の假初ながら、親子鸚鵡の袖ふれて、名残つきせぬ心かな。

と云ふ章句は、多くの物狂の曲の末などに、繰返し〜て歌ひ上げらるゝ所である。殊に爰では悲と喜と二つの情が、綾に織出されて人の心を動かす上に、更に念佛の功德も讚歎を促して止まぬやうであるが、而も此物語の中心を爲すものは、賀茂の御神の信仰であつて、更に其御社の根原には、半分ばかり子敦盛と似通つた話が、神御自身にも御有りなされたやうに、傳へて居るのだから不思議である（八一）

下松は今修學院村大字一乗寺の村の口に在るのが其地だと謂ふ。勿論現在の松は植繼である。世に傳ふるは敦盛卿に稚い兒があつた。源氏の世に爲つて母人之を匿すに便なく、一條の降松に棄てたとあるのが、此一乗寺村の誤だと言ふことで（八三）此ならば法然上人の、賀茂に詣られた道筋とするには宜しいが、やはり些離れ過ぎて居るやうである。どうせ當時の松樹は無いのであれば、今少しく兒捨馬場とでも謂ひさうな場處の近くへ持つて往つて見たい。馬場と云ふ地名は神社正面の大通にもよく有る。即ち神事の折に馬

を牽かせた處で、左右に人家無く松など立並び、棄兒の便宜の有りさうな場所である。
次に下松と稱する松も、洛外に一本しか無かつたと思ふには及ばぬ。一乗寺では枝垂松
のこゝと解して居るやうだが、其はどう有らうとも、随分多く聞く松の名である(八三)紀
州和歌浦にも有つたと云ふが今では如何か。攝津島上郡の下松、此はクダリマツと呼ん
で居る。同じことであらう。周防では下松にも名木の松があつた。鷺頭妙見宮の舊記に
北辰尊星此松に降りたまふこと一七夜、仍て降松と名くとあるにも拘らず、吉田博士は
クダマツのクダは百濟のこと、マツは知らぬなど言つて居られる(八四)星降の松ならば
此東京の近在だけでも數箇所ある。併し空より影向する神を明星や北辰のみとする必
要は無い。多くの社の神は亦神木を擇んで降した。其神を樹下に於て祭る場合には、
乃童子が出て尸童の役を勤めたやうである。隔たり儀式が傳説となる頃には、最
初の神託を宣べた童兒も、同じく神の力を以て降されたやうに考へるに至つたのは、全

くは巫即王子と云ふ信仰が有つた爲で、後に神と祀られる程の名士、例へば人丸は柿
樹の本に現れ、道眞は梅樹の下に立つて居たなど、迄、語つた人が多かつた(八五)日吉の
神官に樹下氏がある如く、賀茂の社家にも松下氏があつた(八六)下松の樹下に棄てられた
嬰兒も、實は或は此類であつて、黒谷道場の俗人たちが、念佛の間の手に評判して居た
別の奇端が、後世記憶の混同を引起したものでは無からうか。殊に手箱に入れて置いて
あつたと謂ふのでさう思ふ(八七)若私の假定が當るならば、奥州荊田嶺神社の兒宮を仲
立にして、各地の塚から生れたと云ふ僧たちの、何も神通無双の大徳と爲つたと傳へら
れるのも、まんざらの根無事で無かつたことが分つて來、笑つてばかりも聽かれぬと云
ふことになるのである。

一七 棄兒の儀式

棄てると言へば慘酷なやうであるが、話の主眼とする所は、産婆の手に掛かるやうな平凡な兒でなかつたと云ふ點に在つたので、兒捨馬場實は兒捨馬場であつたのだから目出たい。其が又近年までの、日本の風習とも一致して居る。ちと脱線であるが、爰で棄兒の話をして見やう。棄兒の統計は毎年六月頃の官報に出る。其中に一つ珍しい事實のあるのを、誰も心づく人が無いやうである。大正六年の分で申せば、全國の棄兒三百三十餘件の内、大阪府が二十に東京府が七十六、他の府縣は悉く十以下であるのに、獨長崎の一縣のみが百二十四ある(八八)是即何を意味して居るか。私は比から芝居講談の時代

を推測して、棄兒は即赤坊の押賣、斷り聽かすの養子の申込と見、肥前の一隅に此古風今に残留するものと解する。芝居などでは親が物蔭に隠れて、投頭巾の福德老人などの、通つて見付けるのを待つて居る。又は所謂情深い人の戸口に置いて啼かせ、あまり誰も眼を覺さぬと、先今晚は連れて還ると云ふやうな話のあるのは、明に刑法の遺棄罪では無いので、單に從來の經驗に基いてと言ふよりも、社會各員の間相互の諒解が無かつたなら、斯の如く頻繁且手輕には子は棄てられまい。支那ならば何兩かに賣る處である。どうしても育てられぬ譯があるとは、八割以上は貧困のことであつて、大百姓や網主などの、頼んでも貰つてくれさうな家へ、手續を簡略にし、同時に後日親と名乗つて出まいと云ふ誓約を形で示して、無代價で下人に賣つたのが棄兒である。私の知るだけでも能登の某海岸、會津只見川の谷の或村々など、民法で豫想せぬ勞働養子を、五人八人代々して居る地方がまだ多い。

此と効果に於ては大分違ふ一種の棄兒があつた。此は拾つて後元へ戻るから、警察の統計には現れぬが、今でも些づゝ棄てられて居る。よく四十二の二つ兒などゝ謂つて、年廻りの家の爲に不吉な兒は、前以て拾ひ方を人に頼んで置いて棄てる。私も一度播磨で子供の時に見た。隣村の物持が兒を棄てるので、鉢巻に半開の扇子を挿み、酔つてヤトトコセを歌ひながら、之を拾ひに行く爺を見た。但し如何な場處に棄てるのであつたかは記臆せぬ。小學校などにも、あの子は一度棄てられた子やと謂ふのがあつた。何でも楊行李か何かに入れて、三分間ほど外に置くことを、棄てるると謂つたらしく思つて居る。駿河の大宮では、斯して呪法に兒を棄てる場處がきまつて居た。神田と云ふ處から少し北へ行き、福石子育神社の前に在つた扁平な石が其で、御一新前には四十二の歳に生れた兒、又はさうで無くても生育の案じられる子を、此石の上へ抱いて來て棄てる。當時の大宮神社の舊公文所の若黨が、其棄兒を拾つて改めて親たちに遣る。斯すれば丈

夫に育つ者と信ぜられて居た。先年死去した此町の某春米屋はもと其若黨であつた。それ故に此老人の葬式には會て拾はれた人々皆會葬して、大層盛大なことであつたと云ふ話である(八九)

一八子賣地蔵

棄兒の俗信の儀式化も、決して新しい事では無かつた。大事な若君に棄といふ名を附けて、生先を禱つた例も至つて古い。場合に由つては低い身分の者に、一旦其子を呉れたことにして、貰つて育てると云ふ慣習もあつた。陸中盛岡地方などは、年廻りの悪い

子に他人と云ふ名を附ける者が多いが、此と同時に萬日と云ふ一種の祝人に、假に愛兒を遣る風も亦行はれ、之を萬日の取子と名けて居た(九〇)又イタコの取子と云ふものもあつた。武州野島村の淨山寺の延命地藏、俗に片目地藏と稱する地藏様に、信徒の者子を儲けた際には請狀を出して、其子を地藏の奉公人にして置くと言ふのも(九一)疑無く同じ趣意の基いたものと思はれる。察する所棄てた拾つたと謂つてもあまりに戯らしい故に、些でも事實に近くする爲に、此様な形式を採つたのであらう。現に江戸でも三代將軍家光生れて二歳の時、健に育つまじなひととして、侍女之を抱いて辻に出で、通り掛りの三人目の人に賣つた。山田長門守ちやうど三人目に來合せ、之を買受けたと云ふ話がある。其頃專することであつたと見えて、御侍に此御子を賣申さう、買はせたまへと女中が云ふと、長門守猶豫せず、いで買參らせんと腰より扇子を抜いて渡したとある。即一本の扇子を代物としたので、後に若君様だと知つて、大に驚き刀脇差を抜去つて、

懷き奉つて直様本丸へ御伴したともある(九二)

伊勢の櫛田川の南岸、多氣郡四正田村の字脇田に、子賣岩一名名付岩と云ふ大石があつた。或は子得岩とも書いて居る。村の人手が産れて七日目に、懷いて此岩の邊に出で對岸阿波會村の者の通るを呼留め、其子に岩の字の名を附けてもらふと丈夫に育つと信ぜられて居た(九三)此も棄兒の一變形であつて、元は阿波會の村民と話合があつて、爰で假の取引をしたに因つて、岩の名は生じたのであらう。名を附けると云ふことは家長の特權である。名を呼ぶのは即支配を意味して居た。其を他人に託したのは、一旦他人の物としたことではなければならぬ。伊賀の名張の瀧原村では、高座山に古い石地藏があつて、亦之を子賣地藏と名けて居つた。赤子を爰に祝すれば長命ならしむと傳へたのは(九四)多分は同じ習慣が行はれて居たので、此場合には地藏が人買の役を務めてござつたのであらう。さうすれば關東の田舎でよく見掛ける、懷に赤子を抱いた子安の地藏様と

全く同系の信仰と云はねばならぬ。私は曾つて野州益子の對岸の塙と云ふ村で、大なり安石地蔵を拜したことがある。其折にも考へたことであるが、村の下を流れる蠶養川は下總へ下つて利根に合する前に、濱街道を横つて有名なコカヒの渡を爲して居る。百年前迄の道中記に、之をば子取の船場と稱へたのを見れば、蠶養も元は子買では無かつたか。然らば隅田川と謂へば聯想する、信夫惣太梅若丸の話の如きも、亦子敦盛の類かも知れぬ。

一九 子安神の變化

此も箱根や佐夜中山と同じく、舊東海道の上で、萬人の眼に觸れた所であるが、近江の土山から水口へ行く間の路の右手に、やはり嬰兒の平安を祈る大な岩が有つて、其は單に岩神とのみ呼ばれて居た。生れた子を岩の前へ連れて來て拜ませると、必長壽堅固なるべしと信ぜられ、近郷から詣る者が多かつた。或は又子無き者、此石に禱れば子を得ると云ふ説もあつた。即天然の石其物を拜したので、岩にして神なるが故に岩神とは云つたのであるが、子安と稱する古來の信仰は正に是であつた。同じ岩神は

又日吉本社の境内にもあつて、日吉記には子安是也とある。此社を繞つて子孫を祈り、誕生の子は百一日に初めて此社に詣で之に名く云々ともある(九七) 子安神の御正體の石であつた例は、他にも澤山ある。武州北埼玉郡池守村の子安明神などは、神功皇后と稱して稚子に乳を含めたまふ天女の、小な銅像を祭りながら、神寶に子安の玉と云ふ水晶の如き小石、及子育石と名くる二寸ばかりの奇石があつた(九八) 全國に何千と有る子安の中で、一面には祭神を木花開耶姫命など、説明するもの、他の一面には之を地藏若くは觀音の苗字のやうにしたものが、益々多くなつて行くにも拘らず、關東の各地に之を無名の母神と信じて、今尙其石體を造立しつゝあることは(九九) 且は人の親の心の闇が、時代にも文明にも破られないものなることを示すと共に、此信仰の會て畏しく強かつたことを、窺はしむるに足るかと思ふ。岩代刈田郡小原の子安阪などは、阪の上には地藏で無くて不動堂がある。昔貝田の宿の女、此峠で安産をした事が有るからと謂つて、安産を

希ふ者此地より、小石又は土塊を持還る習があつた(一〇〇) 一名を兒阪峠とも呼ぶのは、或は宮の兒捨川の神話と關係のあつた爲かも知れぬ。富士山下の杉田村の子安大明神は之とは正反對に非常な難産で死んだ婦人を祀ると傳へ、而も其御影には天冠を戴く女性、幼兒を懷きたまふ像を畫くこと、水戸近傍などで見る浮彫の石像と同じである。縁日は正三十月の各十日、地方の子安講の中心として拜むと云ふ(一〇二) 子安講は土地に由つては十九夜講とも云ふ(一〇三) 子供産み盛りの婦人の團體であつて、日を定めて村の子安様に御籠をし、産の軽いことを祈る爲に、よく今でも子安の石塔を立てる(一〇三) 美濃は千餘年前の記録に、既に兒安神の名の見えた國である。其國南宮神社の攝社には、日本の子安の始と稱する子泰社がある。社の前に黑白二つの丸石あり、參詣の者此石に由つて、生れる子の男女を占つた(一〇四) 其寸法はまだ知らぬが、路傍の石に子を占ふのも多くある風習で、伊勢榊田川の上流に在る礫石などは、往來の旅人之に小石を投

付け、中れば男と云ふことになつて居る(二〇五) 似たやうな話が樹木にも有つた。今は子
安と謂はぬやうだが、甲州東山梨郡下粟生野の諏訪社の神木の杉は、村に兒の生れる前
方、此木の下に赤子の啼聲が聞えた。樹の前ならば男、後の方に聞えると女の子の、産
れる兆と謂ふことであつた(二〇六) 神木に子を禱るものには椿もあれば銀杏もある。乳か
ら思ひ寄つたらしい木には、土佐の柏島では榕樹さへ子安であつた。尾州熱田神宮では
楠御前社を子安神として居る。又孕松の話も多い。念じて其松樹を抱けば子を妊むと謂
ふのである。山城老阪で有名な子安地藏も、産婦の難を救はせたまふ御誓願とあつて、
堂守より松の木を削つたのを出し、之を口に啣へて産をすると過が無いと唱へられた。
(二〇七) 恵心僧都が御本尊を刻むとき、さうしたのに始まると縁起に有る。此阪などは至
つて古くからの交通であつた。もう元の樹が無いものだから、そんな事を謂ふのであら
う。紀州那賀郡の冷水村には、街道の傍に産幸の松と云ふ珍しい名の大木があつた。崖
の上から枝を垂れた一種の降松である。此松の葉を家に持還り、火に燃して夜啼する兒
を照すときは、其癖止むべしと云ふことで、遠近の者來つて之を求めた。土地の説では、
此隣村東上谷の子安觀音は靈佛であつて、龜川五箇村は之に由つて昔から難産が無かつ
た。産幸の松の處は、即ち此觀音を本尊とする極樂寺の、本領の境であつたと謂ふ(二〇八)
此で見れば産幸のサイも亦此道祖神のサイで、そこに在る松の奇瑞の方が、寧觀音の
子安よりも由來久しかつたことを想像し得る。

二〇 境の神に子を禱る風習

最後にたつたもう一つだけ、赤子の聲の話をせねばならぬ。東京の南に近い荏原郡の道塚村に、子取塚と名くる塚がもと有つた。今はどう爲つて居るか、まだ往つて見ぬから知らぬが、此も雨の降る夜の丑三つ時になると、赤子の啼く聲がすると、土地の人たちは謂つて居た(二〇九) 近頃の傳説に於ては、或は妖怪でも居て子を取つて食つたなど、半は名稱から推測した解り易い事に爲つて居るかも知らぬが、而もコトリは産婆のことを今でもさう謂ふ如く、やはり生れた又は得たと云ふ意味に基くものに相違無い。即ち多分は此も古くからの往來の側で、且村と村との境などで、村人屢々來つて丈夫な佳い

兒供を注文した場所であらう。物悲しい塞河原の石積の歌物語は、非常に近世の我々を動かした上に、塚と云へば必ず人を葬る處とする者が多くなつたと共に、如何して斯様な塚の名が出来たかを、一同で忘れてしまつた。故に若頭白通幻等の珍しい話が、世に遣り留まつて居なかつたら、假令諸國に類似の口碑を有つ石や地藏が多少存して居ても、恐くは各自勝手次第の變化をして、學問上の役には立たなかつたであらう。

幸に斯して御一緒に徐に考へて居る内に、兒捨馬場が兒捨馬場であつた如く、又子賣地藏がやはり子買であつた如く、死んだ兒の行く處とのみ認められた塞河原が、子無き着子を求め、弱い子を丈夫な子と引換へ、或は世に出やうとして尙彷徨ふ者に、安々と産聲を揚げしめる爲に、數百千年の間凡人の父母が、來ては禱つた道祖神の祭場と、根原一つであることが、略明白になつた。つまり我々は皆、形を母の胎に假ると同時に、魂を里の境の淋しい石原から得たのである。さう云ふ風に會て信じて居たのである。

どうして又さう信ずるやうになつたかと云へば、我々の昔の埋葬の風が元であつた。永らく使ひ古した魂には、若干の休養を與へねばならぬ。又少々づゝは汚れても居た。之に反して清く新しくして急に不用になつた所謂水子の靈は、遠からず之を再世に出す爲に、大人に比べると遙に手輕の方法を以て、之を始末して置いたものらしい。娑婆の浮世で散々に泣いたり笑つたりした人魂は、佛教以外の宗教でも罪ある者としてをり、之を濟うてやる回向の方法の無かつただけに、一層畏しいものとして境の外へ驅逐した。蟲送疫神送雨風送の類、さては盆正月の聖靈送なども、本の意は皆是であつた。赤子の分は比較的危害も尠いものと見て、單に之を境の神の管理に委ねて置いたので、形の上から申せば、ごくざつとした方法で、斯云ふ一定の場所に、片付けるのが常であつたかと思ふ。そこで後世石地藏でも立てやうと云ふ場所は、多くは再又用ゐられてもよい清い人魂の集合所であるが爲に、爰に我々の祖先は無邪氣なる色々の不思議を見、例

へば新に縁に附いた婦人などが通行して、始めて身重の徴などを自覺してから、禱れば子が得られるやうな信仰を強くしたこともあつたであらう。處が境と云ふものゝ變化には、絶えず政治又は經濟の理由があつた。道路なども追々移つた。それから最惜しい者を斯な荒野良に獨送ることも、次第に忍び難くなつた。赤子の靈と云ふ記憶だけが後に遺るとすると、僧侶や神主の心有つての潤色を待たずとも、月日につれて話は雪達磨の如く成長し、末には或偉人の生立の記ともなるのである。一方には又生活は常に不安である。輪廻轉生の理を信ずるのが、無聊い人の世には責めてもの慰めであつた。又終の力でもあつた。南無や地藏大菩薩。斯の如くして久しく我々が親を救はせたまふ。

引用書名等索引

- (一) 塵袋卷七、僧の數を何口と言ふは何故ぞの條。國記とあるのは風土記であらうと云ふことで、栗田博士は之を古風土記逸文中に入れて居られる。
- (二) 朝野雜載卷十二。益軒全集の第八冊。
- (三) 郷土研究一卷一一頁。吉原頼雄氏報。
- (四) 十方菴遊歷雜記四編の上。江戸叢書の内。
- (五) 新治郡案内に引用した千光寺縁起。次も之に同じ。
- (六) 地名辭書に引用した宗光寺住持次第。但し千光寺の現縁起には明に頭白を常陸の人として居るのみならず、楓軒偶記卷二に依れば、東國戰記には山ノ莊の農民の子とし、母の幽靈が餅を以て育てたことを認めて居るさうである。

(七)日本宗教風俗志三一頁。

(八)郷土研究四卷一五二頁及一六五頁に、南方氏が本文を擧げられた。支那の方は淵鑑類函卷三二一に引いた閑居録、印度のは旃陀越國王經である。楓軒偶記には近代の稗史の中、獺園にも耳新にも母の幽霊が兒を養育した話あり、支那では有ふれた話らしいさある。

(九)楓軒偶記卷二。佐藤成裕の話。

(一〇)横田傳松氏報。郷土研究四卷五一二頁。

(一一)和賀稗貫二郡郷村誌中卷。

(一二)奇異雜談集下卷。戰國時代に出來た本と稱して居る。私はまだ見得ないが、山州名跡志の八阪正法寺の條、近江國輿地誌略の大津國阿堂の條などに、本文を引いて居る。

(一三)和漢三才圖會卷七十七。弘文館本一〇七四頁。

(一四)郷土研究三卷五六九頁、四卷一七二及四九三頁。和泉の桑原は和泉名所圖會。

(一五)蕉齋筆記卷二。國書刊行會本、百家隨筆第三冊。

(一六)攝陽群談卷二。地誌大系の活版本がある。

(一七)同書に文德實錄卷一、嘉祥三年五月壬午の條を引いて居る。此御時既に民間には母子草を餅に入れる習慣が有つたのである。

(一八)因幡志卷二、及卷二十二挿繪。

(一九)一里塚に榎を栽ふる習慣は、徳川の二代將軍かど、よの木を以て之に代へよと命じたのを、榎のこゝも誤解したのが元だと謂ふ。此は作り話であるが、榎の方が利用の途が多い故に、次第に黄楊に代るやうになつたのは疑が無い。而してツゲは又『告げる』と云ふ語と關係があるかも知れぬ。

(二〇)例へば近江國輿地誌略卷七十、神崎郡田付村の土葬司は、房明親王の御葬處と傳へ、同卷七十一、同郡河竝村の堂葬司は、有馬王子の御廟と謂ふ。此外にも同名同口碑があること云ふ。悪王子の話は別に書いて見る積である。

(二一)京都の西南に在る佐比川原は、古くから此問題に指を染めた學者の、第一の注意する所であつた。或は西院川原とも書き、殆此京の書初からの共同墓地であつた。

(二二) 越前名勝志、南條郡の條。地誌大系本。

(二三) 太田蜀山の改元紀行上卷。

(二四) 續太平記にも斯ある。將軍義教公富士御遊覽の條。但し小夜姫と云ふ名は他の多くの小説にも例がある。丸々無意味な後作では無いかも知れぬ。爰でも石になつたと言つたらしい。

(二五) 東海道名所記卷三。又之を引用した多くの古い道中記がある。寶永七年板の増補松之葉には京の研屋に奉公した一節があつて、越前に傳ふる話と近い。郷土研究一卷四二八頁に、南方氏が引いて居られる。

(二六) 諸國旅雀卷二。

(二七) 煙霞綺談卷一。

(二八) 伊勢名勝誌三一六頁。

(二九) 藝藩通志卷九十九。

(三〇) 大日本老樹名木誌。

(三一) 郷土研究一卷四二九頁に、南方氏の説がある。私も今に書いて見たいと思つて居る。

(三二) 飛州志拾遺。郷土研究三卷五六六頁。

(三三) 房總志料續編。

(三四) 伊勢參宮名所圖會上卷。

(三五) 御府内備考卷六引、江戸記聞。

(三六) 麴街略誌稿上卷引、再版江戸砂子。

(三七) 高木敏雄氏編、日本傳説集。

(三八) 嘉陵紀行卷二。文化四年の紀行。江戸叢書の内。

(三九) 石の事ばかり書いた雲根志と云ふ本に出て居た。

(四〇) 福山志料卷一五。此も十年ばかり前に活版になつた。

(四一) 高木敏雄君書狀。

(四二) 福井縣吉田郡誌。十年ばかり前の編纂。

(四三) 月の出羽路卷二。後の話も同じ書物。

(四) 新編武藏風土記稿卷四八。近頃出來た通俗荏原風土記稿には些し異つた記事もある。赤子の

胞衣を洗つて見たら、吉良家の定紋があるので、寃を知つたと云ふ。十三塚の事は、曾て石神間答にも又考古學雜誌にも、頗に論じたことがある。村の境の上に築いたものらしい。東京の近には澤山ある。又十二人の侍女と一人の姫君のことは、北豊島の戸田川にも存する口碑である。

(四五)吉蘇志略卷三。木曾路名所圖會卷三等。赤子塚の隣に櫃塚あり、寶物を埋めたこと云ひ、且觸れば崇ありと謂ふのは、注意すべき點。

(四六)明治神社誌料引、三國名勝圖會。

(四七)此にも長い話があつて、此序に述べてしまふことは出来ぬ。但し空船がどんな船であつたかは舞の本の大職冠たけを見ても分る。小子塚の話の中に、小子を臼に入れるとある、其臼に該當するものである。

(四八)安蘇史二〇六頁。明治四十二年刊、荒川朴民著。

(四九)張州府志卷一六。此も近年活版にした本がある。

(五〇)和漢三才圖會卷六七、八二〇頁。

(五一)漫遊人國記三九〇頁。故角田浩々著。

(五二)太田蜀山の調布日記。蜀山全集に出て居る。

(五三)談海集卷三五。

(五四)和漢三才圖會卷七五。又本朝國語にも。

(五五)三國地誌卷三〇引、童蒙抄。驗の杉の由來である。「神を助けた話」の中にも出て來る。

(五六)古今著聞集卷一七。

(五七)觀惠交話下卷。大人の足跡は別に書くつもり。

(五八)石見外記上卷。

(五九)遠野物語に書いて置いた。

(六〇)相中襍志下卷。小兒の幽靈は七月地藏祭の秋だけ出るやうに讀めるが、確で無い。

(六一)有斐齋劄記。

(六二)空おぼえだがら違ふかも知らぬが、何でも斯な感じを與へる文句であつた。但し梁塵秘抄卷二の法華經の今様、方便品の九首の中に、童子が石塔を積むことを歌つたものはある。「いにしへ童子のたはふれに云々」とある。

(六三)能登國名跡志下卷。今の鳳至郡三波村大字。

(六四)信濃佐々禮石卷一四。栗飯は一名天狗の麥飯、一種の菌類である。近年植物家の研究が公表せられた。

(六五)甲陽茗話と云ふ寫本に出て居る。

(六六)溫故之槩第六。二十年程前の月刊雜誌。

(六七)西遊行囊抄卷三。

(六八)和訓栞、サヘノカハラの條。何に由つたか不明。

(六九)眞澄遊覽記卷一一。

(七〇)地名辭書續編に引いた。松浦武四郎紀行及永田方正氏説。

(七一)三國名勝圖會

(七二)佐渡案内一二〇頁。

(七三)淺井了意の東海道名所記卷二。

(七四)溫故之槩第九編。

(七五)鹿角郡案内九頁。石井末太郎著。大正二年花輪にて刊行。

(七六)燕居雜話。百家説林の中に在る。

(七七)此點だけに付ては、十年前に出した私の石神問答の説明を、あまり變更する必要を見ない。

支那の道祖の祖の字も、阻の字と同じて災害を防ぐ意味があつたこと云ふ人もある。

(七八)此問題に付ては、郷土研究四卷終刊號の、玉依姫考を讀んで貰ひたい。

(七九)刈田郡案内。近年郡役所で編纂した本。又寫本の武輿行程記等に依る。

(八〇)雍州府志卷八、扶桑京華志卷一、京羽二重織留卷三などに此話が出て居る。謠の「生田敦盛」だけに依つたものでは無いと認める。

(八一)別雷神は又他の玉依媛を母とし、御空の神を父として御生れなされ、後に父神の處へ御昇りなされたと傳へ、又下鴨には其御母を祀つて居る。此も前に掲げた玉依姫考の中に、稍詳しく説いてある。

(八二)山城名跡志卷五に依る。同書卷十七には、一條にも堀河東の某邸内に、下松の植繼があつたことを記して居る。

(八三)俗名所坐知抄下卷。

(八四)地名辭書一一六二頁。

(八五)此問題に付ては、郷土研究三卷五一三頁以下、「勸請の木」考を見ていたゞきたい。

(八六)賀茂の松下氏のことは、まだ詳しくは知らぬが、中世或天皇の御胤、此家に傳はつたと謂ふのは、誤傳で無ければ珍しい偶合である。

(八七)神を宮の中に奉安する風習は、うつば船及び玉手箱のこゝと共に、又一度詳しく述べたいと思ふ。伊勢の齋宮の始祖倭姫命が、もろ箱の中の小さな神であつたこと、諸社根元記に見えて居る。

(八八)大正八年六月二十六日官報。

(八九)山中笑翁の吉居雑話にさうある。

(九〇)金田一京助氏話。

(九一)十方菴遊歴雜記第二編上卷。

(九二)談海集卷三に詳しくある。實事談である。

(九三)伊勢名勝誌に引いた勢國見聞集。四疋田村は今の津田村の大字。阿波曾は飯南郡射和村の内になつて居る。

(九四)三國地誌卷八〇。

(九五)近江國輿地誌略卷五二。甲賀郡水口町大字新城の地である。

(九六)蜀山人の改元紀行下卷にさうある。

(九七)輿地誌略卷二〇に引いて居る。日吉記は天正五年に書いた本である。伊豆の子安明神の岩神であつたことは、平田篤胤が玉襷卷四に詳しく論じて居る。

(九八)増補忍名所圖會。

(九九)此問題に就ては、考古學雜誌一卷十一號に、私の書いた論文がある。

(一〇〇)仙臺封内風土記。

(一〇一)共古日経卷九。

(一〇二)郷土研究四卷三七五頁等参照。

(一〇三)印旛郡誌香取郡誌などにも出て居る。

(一〇四)木曾路名所圖會。

(一〇五)四年前の旅行の時に聞いた話。五鈴遺響にも此石らしい記事がある。川の中央に在り、倭姫命の舊跡などある。兎に角吉野からの參宮路で人がよく知つて居た。飯南郡宮前村大字赤桶

(一〇六)甲斐叢記に出て居る。今もさう謂ふと山中翁の甲斐落葉にある。

(一〇七)山州名跡志卷九、大枝山大福寺の條。

(一〇八)紀伊國續風土記。冷水村東上谷村は、共に今は南野上村の大字である。

(一〇九)古川古松軒の四神地名録。今から百年餘前の實地踏査記である。

大正九年二月十五日印刷
大正九年二月二十日發行

赤子塚の話
定價金四十錢

著者 柳田國男

發行者 三井玉輝

東京芝公園九

發行所

東京芝公園九號地
振替東京一四二七七

立文社

所刷印 崎川 所刷印

菊地幽芳著	女の生命	前編後編	定價各壹圓八拾錢	火の如く氷の如き深刻なる近代の戀愛の諸相を寫し、大阪毎日に連載して未前の好評を博したる上下二卷の長篇
岡本綺堂著	片絲		定價壹圓五拾錢	豊麗な美貌を有して放逸な生活に入るべく餘儀なくされた女主人公の波瀾に富む一生を叙した七百數十頁の長篇
渡邊霞亭著	殘月		定價壹圓六拾錢	不自然な戀の悲劇、富豪と貧民の葛藤部落民の哀れな境遇、これ等を題材とした清新な家庭小説で又社會小説
長田幹彦著	ゆく春		改定價壹圓貳拾	青春の血に燃ゆる若き男女に結ばれる、不思議な戀の物語で、儘にならぬ現實は讀者に悲歎の涙を禁じ得ざらしむ
長田幹彦著	不知火		定價貳圓五拾錢	大阪朝日へ連載して滿天下の士女を泣かせた長篇で、妙齡の二婦人を中心とし自由戀愛の陶酔と幻滅を語る物語
長田幹彦著	繪日傘	祇園全集 卷五	定價各壹圓參拾錢	祇園情調を描いた全集五卷、哀艶極まりなき物語は悉く人生の詩美と歡樂の泉。各卷の装幀共に空前の美を極む
長田幹彦著	白百合		定價壹圓貳拾錢	仇に美しき短篇十種を収めたもので劇場的な復讐、鳥羽港、錦之助等、總べて情緒文學の珠玉と稱すべきもの

長谷川時雨著	情熱の女		定價壹圓貳拾錢	淨瑠璃に芝居に現はれた昔の女達の清姫、お七、梅川、おさみ等が作者の胸に新らしく蘇つて寫し出された物語
松居松葉著	惡人手形帳		定價壹圓參拾錢	鬼探偵と呼ばれた老探偵の苦心談六篇と讀唇術なる不思議な機能による女の探偵談六篇、何れも上品な探偵情話
北島春石著	巡禮歌		定價壹圓	幼い姉弟二人が巡禮になつて母を尋ねる、母は東京で悪人の爲め死に勝る苦みを受けて居る、哀れな悲しい物語
金尾夏子譯	金か女か		定價壹圓貳拾錢	黄金の威力が強い、女の節操が強い、か、本書は此の生命的な問題を取扱つて見事に成功した痛快極る通俗小説
金尾夏子譯	名ばかりの妻		定價壹圓貳拾錢	外國で好評を得てゐる婦人向きの通俗小説で、社交界の女王と仰がる美人を中心とする清新な肩の凝らぬ物語
今井泰三著	人間料理		定價八拾錢	四谷の放火、信州の毒殺、吉原の心中等暗い事件の経路を法廷の傍聴席から同情の眼で眺めた興味ある人生記録
小田律譯	大兇賊の娘		定價壹圓貳拾錢	巧妙な大犯罪の後を追ふ名探偵の苦心戀愛が、纏れ、面白く、面白く、面白く

小田律譯	戀の地獄	定價壹圓貳拾錢	獨逸軍隊の内情を素つ葉抜いた爲に原 著は獨逸で發賣禁止になつたが其翻譯 は世界各國を沸騰せしめた戦時小説
小田律譯	獨探の妻	定價壹圓貳拾錢	モリス・ルブランの原作。獨探の妻を 中心として戀愛、政治、戦争、探偵を 巧みに織り込んだ痛快な通俗小説
小田律譯	アルセンルパン	定價壹圓貳拾錢	ルブランの原作で、神出鬼没變幻極ま りなき希代の大俠賊アルセン・ルパン の正體は愈々本篇に於て看破せらる
小田律譯	塹壕生活	定價壹圓	英軍の精華たる愛蘭聯隊に從軍せる兵 卒の隨筆的小説で歐洲戦争に於ける塹 壕生活を如實に展開する痛烈な物語
小田律譯	カイゼルの末路	定價壹圓	カイゼルが支那人に化けて亞細亞民族 を糾合し歐羅巴を轉覆せんとする奇抜 な探偵小説で日本も處々に顔を出す
小田律譯	成金大事業家	定價壹圓	奇策縱横無一物から踏出して忽ち大事 業を起し七顛八起の活動目覺しき面白 い事此上なしの小説で且つ企業案内
田中貢太郎著	怪談	定價壹圓	岩魚の怪、水魔、女の姿、蛇怨、偷盜 篇、ある洋妾の話等三十四餘篇、總て これまでにない怪談異聞の物凄い物語

田中貢太郎著	切支丹屋敷	定價壹圓拾錢	切支丹屋敷、有馬温泉物語を初め、收 むる處總べて十五篇、どれを讀んでも 興味津々たる情話文學の模範的作品
薄田泣菫著	後の茶話	定價壹圓	平淡清麗の才筆で書かれた古今東西の 逸話珍聞約百四十篇を蒐めたもので諷 刺と諧謔に満ち、正に一服の清涼劑
薄田泣菫著	新茶話	定價壹圓貳拾錢	『後の茶話』の姉妹篇で前者以後最近に 至るまでの百五十篇が收めてある、觀 察の奇警一讀三歎に堪へざらむ
本山荻舟著	名人畸人	定價壹圓	大雅、惟然坊、一蝶、北齋、華山、長 英、一茶、草雲等名人畸人の名ある二 十家を捕へて其面目を躍如たらしむ
渡邊虹衣著	骨董掘出物語	定價壹圓五拾錢	大阪を中心とする近畿の書畫骨董界の 面白い掘出し物の珍談五十餘篇を收め 名匠の逸話を點綴する興味ある物語
東健而著	潛航艇物語	定價壹圓五拾錢	潛航艇の發達、原理、操縦、歴史等を 平易に叙し獨逸スピールゲル艇長の「U 二〇二號艇の實戰記」が添へてある
田中宏著	豚肉料理	定價壹圓	燒物、茹物、煮物、煎物、汁物、揚物 蒸物、鍋物等十九類に分ち、二百五十 種の調理法を説く、食道樂の寶典

田中 純著	お伽 魔法樽	定價八拾錢	佛國文豪ミユツセの長篇お伽噺で少年少女の心に純粋な美を味はしめるために書かれた奇想天外の珍らしい物語
本間 久著	お伽 太郎の動物	定價六拾五錢	太郎少年が観察した熊、栗鼠、山猫、猪、其他の動物の生活性情を物語式に書いたお伽科學で有益な家庭の讀物
内藤 豊著	滿州より歸りて	定價六拾五錢	滿州の自然と人情風俗から興へられた第一印象を叙したもので旅行者には手頃の案内記である、挿入寫眞數十點
大井冷光著	哈爾濱まで	定價六拾五錢	朝鮮から滿州各地を経て哈爾濱に至る途上所見を少年少女に讀ませる爲め面白可笑しくお伽嘶風に書いた旅行記
玄文社編	生花大鑑	定價貳圓	山本理吟氏以下現存する花道諸流の家元及其の主なる社中數百名家の肖像と生花を精巧なる寫眞版に附したるもの
杵屋勝四郎著	長唄新註	定價五拾錢	鶴龜以下三十三番の長唄に一々解題を附し唄の出來た由來から唄ふ時、彈く時の心得までも詳説した長唄心得書
未來社編	日本象徴詩集	定價貳圓	最近詩壇の象徴詩を蒐めたもので敏、有明、白秋、健、露風、白蓮等三十二家の作品數百章を掲ぐ、装頓頗る美

木下利玄著	歌集 紅玉	定價壹圓七拾錢	大正三年以後の作品中最も自信のある短歌五百數十を集めたもので緋鹽灘にルネサンス模様の装幀は贅澤の極
川路柳虹著	はつ恋	定價壹圓	短章百五十餘篇、悉く戀愛を歌つて純情無比、感情の迸る限り盡し琴線の響く限りを竭す、愛誦禁止難きもの
伊藤白蓮著	几帳のかげ	定價壹圓五拾錢	九州の富豪伊藤傳右衛門氏夫人輝子の君の詩歌集で歌百首詩二十三篇を収む全部光澤紙羊皮表紙稀に見る美本
吉井 勇著	歌集 鸚鵡石	定價九拾錢	歌舞伎情調を歌つた短歌三百首總て熱情的な浪漫的な歌ひ振り、水島、田中名越等諸畫伯の挿畫數十葉を添ふ
森 林太郎著 三田文學會編	「蛙」三田文選	定價七圓	三田文學及び慶應義塾文科關係者の代表的作品全部を網羅し別に森博士の翻譯小説、脚本、詩を一巻させるもの
芥川龍之介編	新思潮選	定價壹圓六拾錢	谷崎潤一郎、後藤末雄、芥川龍之介、久米正雄、菊池寛等新思潮派の十三作家の代表的作家十八篇を収めたもの
岩野泡鳴著	猫八	定價壹圓五拾錢	猫八、野田新兵、島等の九篇、總て詩味と滑稽味の豊かな作品のみを収めたもので著者の一面を代表すべきもの

吉井 勇著	句樂の話	定價六拾錢	落語界の怪傑、蝶花樓馬樂の逸事を材とした小説で、『句樂の手紙』『師走空』『句樂日記』『句樂忌』の四編より成る
小山内薫著	英一蝶	定價六拾錢	『英一蝶』『仲麻呂の獨白』『伊左衛門』他三篇、單なる歴史小説でなく個々に著者の心境を反映する渾然たる藝術品
武者小路實篤著	或る脚本家	定價壹圓五拾錢	收むる處『或る脚本家』及び『四人』の二編、前者は長篇小説で後者は脚本、共に著者の傑作として定評あるもの
長田秀雄著	午前一二時	定價壹圓五拾錢	大正元年より七年に至る著者の、小説全集で、午前一二時、齒痛、おつまの顔、嘘、義足、冷笑、幽霊の十篇を集む
素木しづ著	美しき牢獄	定價一圓五拾錢	著者の遺した唯一の長篇小説で結婚當時の思出を叙し、例の素直な美しい感情を描いて最も成功した作品である
和氣律次郎著	死刑囚の手記	定價壹圓貳拾錢	どうかして助けてくれと両手を合して歎願した懺悔録である、血と涙との記録である、其眞摯な告白は小説以上
杉質阿彌著	舞臺觀察手引草	定價壹圓參拾錢	和藤内、實盛、松王丸、辨慶、其他舊劇に現はるゝ主要人物の型に關する研究情到宏博、好劇家座右の必携書

關根默庵著	劇壇五十年史	定價壹圓八拾錢	明治初年以後五十年間の複雑なる東都劇壇の變遷を精述したもので材料豊富明治演劇史としては今唯一の著
井桁佐平著	芝居みたまま	定價五拾五錢	直待、めくら兵助、椀久物語、大盃、鳥目の一角の五篇名優の舞臺を眼前に髣髴せしめ、素人の鑑賞眼を養ふ
田村成義著	劇壇無線電話	定價壹圓五拾錢	明治大正劇壇の裏面史で名優、脚本作家、興行者等數十人の秘事逸話を遠慮會釋もなく叙述した劇界無二の珍書
豊島屋主人著	左團次評傳	定價五拾錢	左團次の生立から現在迄を年代記風に書いた評傳で其人物藝風を躍如たらしめ單なる讀物として興味ある物語
小山内薫著	舊劇と新劇	定價壹圓五拾錢	舞臺の色彩、戯曲の内容等に關する研究あり、舊劇保存策、新劇復興策等の議論あり、總て眞面目な研究と評論
村田烏江著	支那劇と梅蘭芳	定價壹圓	梅蘭芳の略傳を説き其批評を蒐め支那劇の沿革と脚本の筋を語り其見方を教ふ、支那劇の研究家には無二の手引
本山茨舟著	續名人崎人	定價壹圓	『名人崎人』の第二篇で光悦、白猿、也、有、靄崖、竹田、風來、志道軒、賣茶翁、鳥洲、梅關、鐵翁、君平等十六名家を叙す

本山萩舟著	續々名人畸人	定價壹圓貳拾錢	『名人畸人』の第二篇で前二卷に掲載せられざる畫家俳人名匠志士の逸話的生涯を描寫して愈々精巧を極むるもの
柴田天馬著	聊濟志異	定價貳圓貳拾錢	狐狸妖怪に纏綿する、凄艶極まり支那怪談の代表的名篇十數篇を和譯して醒風肌を射すの思ひあらしむる珍香
長田幹彦著	呼子鳥	定價壹圓八拾錢	秋風咽ぶ祭の夜に七間の虚生で泣きながら蜘蛛の子のやうな危い藝を演ずる女藝人の熱火の如き戀を描いた物語
佐藤紅綠著	黃金	定價貳圓參拾錢	現代に於ける黄金萬能の弊風を決別して至純至清の人情美を高調し人道主義の旗幟に參する家庭小説兼社會小説
長田幹彦著	嵐の曲	定價壹圓七拾錢	嫉妬、怨嗟、術策の恐ろしき陥穽に圍繞されて終に其の藝術と節操を惡魔の手に捧ぐる可憐な女聲樂家の物語
竹久夢二著	たそやあんど	定價九拾錢	艶に優しき古來の端唄の遺瀨なき情調を畫伯が微妙な彩管に托して伴奏したる美しき畫集、木版色刷十葉を添ふ

~~3.3.22~~